
IS～インフィニットストラatos～黒騎士は織斑一夏

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS-インフィニットストラトス- 黒騎士は織斑一夏

【Zコード】

Z7189X

【作者名】

AST

【あらすじ】

変態腐れニート神との決戦で彗星に押し流されたマキナは、偶然にも円環から弾き出されてしまう

気が付けば、彼は織斑一夏として未知の世界に生まれていた。

この小説は一夏がマキナだったらカッコ良くな?という妄想から生まれた駄文ですので期待しないでください

第一話（前書き）

とつとう書いてしまつた連載小説
どこまでいけるか分かりませんが
不安だらけのこの作品にお付き合いいただけるのでしたらお願ひし
ます。

第一話

ギロチンの刃に自分の首を飛ばされ敗北しながらも、やっと自分の名を思い出せた事

自分を創り出した腐れ二ート神との決戦で流星に押し流された自分の体が何処かへと墜ちてゆく浮遊感

ずっと墜ち続けた自分が新しく生まれ落ちた瞬間の光

「Jの子の名前は_____」

第一話

織斑一夏は前世の記憶というものがある。

否、気づいたら新しく生まれ変わっていたという表現が正しいだろう
前世の彼であったのなら即座に死を望み、座に存在する変態二ート
神を呪つていただろう

だが、この身は前の様に死んだ身の姿では無く

織斑一夏という人間の肉体であり前世の姿では無い
かつてマキナと呼ばれ、本当の名をミハエルと呼ばれた彼の前世は
やつと死ぬ事が出来たと言う事だ。

ならば自分は織斑一夏としての人生を生きてゆこうと決意した。
まあ、ここまで良かつた。

軍事転用された宇宙用マルチフォーム・スーツ、インフィニット・
ストラトス、通称 IIS

篠ノ之束によつて開発され、女性しか起動できないと言つ欠点の為に女尊男卑の社会を生み出した。

現在はスポーツとしての形で落ち着いている。

そして国連によつて造られたISの操縦者を育成する学園、IS学園

「何故、俺はここに居る・・?」

そう呟き、周囲を見回す。

かつて小学生のころに分かれ、和風美人となつた幼馴染に目をやると目を逸らされた。

本来、男である篠の一夏がここに居るのは、受験会場を間違え、偶然ISに触れたら起動してしまつたからだ。

クラスメイトは全員女子、この状況を悪友の五反田弾に言つたらそれ何てギャルゲー?と心底羨ましそうな視線を浴びせながら言つたのを覚えている。

その時は「そつか・・」と素つ氣無く返しただけだが、この気まずさと居心地の悪さの中で新しい人生の青春時代を過ぐすのかと考へると

今なら言える。

今すぐ代わってくれ!と

「――くん、織斑一夏くん
「む・・?」

気が付けばクラスの副担任である山田真耶が自分の名前を呼んでいた。

「あ、あの、大声出しちゃつて、『めんなさい』あの、お、怒つてる?怒つてるかな?」

「ゴメンね、ゴメンね!で、でも自己紹介、『あ』から始まつて今『お』なの・・」

だから、織斑君の番なんだよね、だからね、『』、『メンね?・自己紹介してくれるかな?』

ダメ?と涙目になつて山田先生を落ち着けてから自己紹介をする事にした。

「・・・落ち着け」

「は、はい！」

「ふつきうばうな一言の筈なのに

何故か年上の男性に優しく言われた様に感じた山田真耶は頬を紅く染めながら答えた。

自己紹介をするべく一夏は席から立ち上がった。

「織斑一夏だ。・・・よろしく頼む」

彼の自己紹介終了

「えつと・・・以上ですか・・・？」

「これ以上、言葉で語る意味は無い」

キュン！-

多分、クラス中にそういう擬音が聞こえた気がする。

これが普通の男子なら単なる格好付けだと思われるだらう

しかし、一夏の多くを語らない寡黙な大人の男を感じさせる所

所謂ハードボイルドな男の雰囲気が漂っていた。

クラスの女子たちは自分達と同年代である筈なのに、

はるかに一回りも一回りも年上の大人であるかのようを感じさせる

一夏にときめきを覚えた。（個人差はあるが）

「お前がそういう性格なのは分かつていたが、自己紹介としてそれはどうなんだ？」

その言葉と共に教室に入ってきたのは、

一夏にとつて唯一無二に家族にして、幼い自分を学生の身でありながらも必死に自分を養ってくれた大恩ある実の姉

世界一のIIS操縦者と名高い織斑千冬であった。

彼女の頬がやや赤く染まっているのはどうしてだらうか？

「すまないな、山田君。挨拶を押し付けてしまって・・・」

「いえ、これ位の事は・・・」

取り敢えず座る一夏

「全く・・・お前はもう少しマトモな自己紹介は出来ないのか？」

「・・・姉さん」

スパン！と出席簿で頭を叩かれた。

「ここでは織斑先生と呼べ、いいな？」

「…分かりました。織斑先生」

その後、すぐにクラスのミーハーな女子達が騒ぎ出したりしたが、一夏は我関せずと言つた様子で居たのだった。

第一話（前書き）

続きです。

素人の駄文を読んでください、ありがとうございます。

第一話

授業が終わり少しの間の自由時間となつた。

一夏はひたすらに腕を組んで目を閉じていた。
彼の周囲にいる女子達は話しかけたい様だが、良くある誰が話しかけるかで言い合つていた。

すると彼女達とは別の女子が一夏に話しかけた。

「ちょっとといいか？」

閉じていた眼を開けて声の主の方を見る。

「・・・ああ」

短い返事を返し、席から立ち上がる。

「ここは人が多い、屋上で話そつ」

教室の至る所から残念そうな声が聞こえたが、一夏は気にする事も無く彼女に連れられて行く

第一話

人気の無い一年校舎の屋上で一夏は久しぶりに再会した幼馴染と二人きりでいた。

「久しぶりだな、篠。六年振りか」

「ああ、お前も相変わらず無口なままだな」

「・・・饒舌な方が良かつたか？」

「いや、それはそれで何か気持ち悪い」

「・・・随分な言い様だな」

少しムツとした感情が声にも伝わる。

どうやら一夏の感情は顔で無く、声に出るらしい

「・・・まあ良い、教室で一目見てお前だと分かつた。」

「そ、そうか?」

「髪型、眼、雰囲気・・・こんな所か」

篝は顔を照れくさそうに自分の髪の毛を弄っている。

一夏は彼女との記憶を思い返していた。

自分の拳は強すぎた。

だから彼女の実家である神社の道場で剣道を学び始めた。

そこで共に剣を学び高めあつた幼馴染

姉妹揃つて人付き合いが苦手で両親が悩んでいた事も思い出せる。

最初の頃はお互いに交わす言葉は少なく、素つ氣ない会話ばかりだつた。

まともな会話をする様になつたのは彼女が男女と馬鹿にされ、イジメを受けていたのを助けた時からか

馬鹿にされている彼女を抱き寄せ、ただ相手に向かつて一言

「黙れ」

それだけで彼女にイジメをする者はいなくなつた。

子供なら氣絶する寸前の殺氣をぶつけたのだから当たり前である。ちなみに一夏は氣づいていないが、この時の篝の一夏を見る眼は王子様を見る眼だつたらしい

それから一夏は篝を抱き寄せて胸の中でひとしきり泣かせた後に元氣づける為に彼女の額にキスをした。

これは精神が子供の扱いに慣れていない独り身のオッサンである一夏が、胸で泣いている篝をどう元氣づけようか必死に考えていると唐突に前世で唯一の子持ち（親父として色々ダメな美丈夫は除外）で子育て経験のある同僚ならどうするかと思い付いた結果である。効果は抜群だつた。むしろ抜群すぎた。

何故なら、その直後に同僚だった白騎士の如く神速の速さで走り出したのだから

その時の感想は

「……どうやら元気になれた様だな。感謝するぞ、ハビロン」

何処かで困った様に苦笑しながら“やつぱり兄弟かしらね？”と自分が育てた曾孫に言うFカップの巨乳美女が居たとか何とか…そろそろチャイムが鳴る頃だろうと思つた一夏は過去の思い出から帰還して簞に言つた。

「話したい事はまだ有るだろうが、そろそろ鐘が鳴る頃だ、戻るぞ。

「そう・・・だな」

少し残念そうなま

少し残念そうな表情になる筈を見て一夏にやれやれといった様子で溜息を吐くと

「筆」

「な、なな何だ？」

「綺麗になつたな」

そう言って昔の様に額にキスをした。

「」――――――――

?

筆は顔がものすごい勢いで真っ赤に染まり、ぶしゅう～～～と蒸氣を出し

まるで蒸気機関車の如く、猛スピードで教室にすつ飛んで行った。

「…・・・・・熱でもあつたのか?」

“やつぱ、罪造りな男だよね。あのマキナがあんな事するなんて思わなかつたけど、流石は藤井君のお兄さんつて思えるよね？”

と また何処かで 好意を抱く自分の後輩を弄るケニー・ターの少女
が居たとか何とか・・・

その後、授業に無事、間に合った一人であつたが、葦の方は顔を真っ赤にしながらもどこかニヤけており
千冬は、またコイツかと言いたげな表情で一夏を見ていたのだった。
「・・・・・・・・？」
当の本人はやっぱり気づいて無かつた。

第一話（後書き）

なんかマキナがキャラ崩壊を起こしている気がしなくも無い
リザさんと玲愛先輩は完全な傍観者の場所にいます。
直接、話に関わることはあります。
多分ね

第三話（前書き）

今回、マキナ一夏を喋らせ過ぎた。

キャラが崩壊していいる様な気がもつとしてきたぞ？

・・・やつべえ、お気に入り登録している人が意外と多いぞ

フレッシャーは無い（キリッ）と言いたいけど・・・

・・・・・・・うん、やつぱり無理

「～～～であるからしてEISの基本的な運用は～～～」
一夏が篠と教室に戻つてきてから、現在一限目の授業を受けている。
相変わらず一夏は無表情で教科書を見ていた。

篠の方はふしゅ～と顔を真つ赤にしながらも何とか授業を受けている。

流石にその様子を不審に思つたのか

「えつと・・篠ノ之さん？」

「は、はいッ！？」

「随分と熱っぽそうに見えますけど大丈夫ですか？」

「も、ももも、勿論です！大丈夫です！」

物凄い動搖しながらも答える篠

その様子にクラスメイト達の乙女センサーは教室に戻つてきた様子や
それからのニヤケ顔と蒸気噴射から、休み時間に絶対何かあつた！
と確信するのだった。

「ちよつとよろしくて？」

「・・・む？」

一限目の休み時間、今度は金髪縦ロールのお嬢様が一夏に話しかけた。

「なんですの！そのお返事。私に話しかけられるのも光榮なのですから

それ、相応の態度と言つ物があるので無いかしら？」

それを聞いた一夏は即座に脳内情報を検索、該当する人物を探し当てる。

「英國の代表候補生か・・」

「その通りですわ。名前まで覚えていらっしゃらないのは、如何なのかしら？」

「覚えていない訳では無い。セシリ亞・オルコット」

ジロリとセシリ亞を見ると、ぶつきりぱつぱつと言つ

「何の用だ？」

「まあ！何て物言いでしょう！？本来、私の様な選ばれた人間とクラスを同じくするだけでも奇跡なのですわよ？その辺りをお分かり頂けるかしら？」

「そうか・・・幸運だ。」

「馬鹿にしているのですか！？」

喰つてかかるセシリ亞と我興味無しと言つた様子の一夏

まるで構つて欲しい犬が吠えてくるのを適当に相手する飼い主にも見えなくない

「ふ、ふん！まあ、よろしいですわ。何か分から無い事が有つたら泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ！何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから！…」

ある程度落ち着いたセシリ亞が偉そうに言つが

「俺も倒した。」

「・・・・・は？」

セシリ亞だけで無く、会話を遠巻きに見ていたクラスメイト達まで

呆けた声を上げた。

「わ、私だけと聞きましたが！？」

「女子では、な」

「で、では、私だけでなく貴方も倒したと言つのですか！」

「ああ」

「どうやって！？」

ガアツと再び食つて掛かるセシリ亞

教官を倒したと言つ事に興味深そうに眼をキラキラ輝かせているクラスマイト達

彼女らに説明するよつに一夏は語る。

「突撃したら、向こうの方も突撃してきた。」

「それで？」

「懐に入った。」

「そして近接武器を使って倒したと？」

「頭掴んで地面に叩きつけた。」

「ひどい……」「ひどい……」「ひどい……」「ひどい……」「ひどい……」

実際、相手になつた真耶は凄まじい速度で地面に叩きつけられた衝撃で気絶

そのまま追撃してもう一方の拳を叩き込もうとしたら

ブザーが鳴つて試験が終了した。

まさか高空から地面に顔面を叩きつけられるなんて経験したのは彼女が初めてだろう

意識を取り戻した真耶はその時の記憶が飛んでいたらしいおそらく精神の安定を図るために脳が記憶から消去したのだろうその後、千冬に“お前は教官を潰す氣か！”と怒鳴られた。すると、チャイムが鳴りだした。

「ツ！・・つ、続きはまた後ですわ！！」

セシリ亞は捨て台詞を吐くと自分の席に戻つてゆく

三限目の授業を終え、今は四限目の授業だ。

「これから再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決める。クラス代表者とは、そのままの意味だ。対抗戦だけで無く、生徒会の会議や委員会にも出席する。まあ、クラス長の様なものだ。クラス対抗戦とは入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まれば余程のことが無い限りは一年間変更は無い。その点を踏まえておけ」

教壇に立つた千冬が全員に言い放つ

いつも通りの一夏は興味が無いとばかりに腕を組んで千冬を見ている。

「はいっ！織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！！」

クラスメイトが次々と一夏を推薦する。

「では、候補者は織斑一夏・・他にはいないか？自他推薦は問わないぞ？」

それに反論する声が上がった。

「待つて下さい！納得がいきませんわ！！」

机を叩きながらセシリ亞が立ち上がる。

「そのような選出は認められません！！大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！！私に、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと言うのですか！？」

更にセシリ亞は捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！それを珍しいからと言う理由で極東の猿にされでは困ります！！大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛でしか――「下らん」何ですって？」

一夏の言葉の端々には怒りの感情が感じられた。

「下らんと言った。クラス代表になるのであれば、国家の代表候補生ならば

他国を国を侮辱する言動は慎め、英國には礼儀と言つ物が無いのか

？」

普段寡黙な一夏がここまで喋るのは結構怒っていると言ひつ事だ。

「なつ、私の祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのは貴様だ。ライミー英國人」

イギリス人への侮辱の言葉を言われたセシリアは

「決闘ですか！？」

「良いだろう」

前世で黒騎士と呼ばれた男に挑戦状を叩き付けた。

「もし私が勝つたら小間使い！いいえ、奴隸にして差し上げますわ
！！」

「俺が勝つた場合はどうするつもりだ？」

「そんな事、万が一にもあり得ませんわ！」

もし貴方が勝つたら奴隸でも何でもなつて差し上げますわ！…
まあ、そんな事あり得ませんが！…と言つセシリアに一夏は問つ

「手加減はどうする？」

「あら、早速お願いかしら？」

「違う、俺の手加減だ。」

するとクラスの女子が一斉に笑い出す。

「織斑君、それ本気で言つてるの？」

「男が女より強かったのって大分昔の話だよ？」

日々に言うクラスメイトが言うが、下らなさそりに一夏は語る。

「それは女がISを使えるからだ。女が男に対しての絶対的優位性を持つISを

男の俺が使える。それがどういう意味か分かるか？」

その言葉にクラス中が押し黙る。

「それにIS以外の肉体的要素は男の方が上だ。学力は本人次第で
如何にでもなる。」

つまり、と一夏は続ける。

「ISが使える事以外で男女に差は無い」

俗物共の政策で女尊男卑の社会が作られただけだ。

と見事に政治家を敵に回す発言を一夏はした。

「話が逸れたな・・・尤も、俺と貴様に経験による差があるのは否めん。

だが、決闘に手加減を加えるのも誇りに反するか・・・」

一夏はそう言つてセシリ亞を見据える。

「良いでしょう！私の誇りに掛けて貴方を全力で倒して差し上げますわ」

その言葉に一夏は僅かにニヤリと笑つた。

それに気づいたのは簫と千冬の二人だけであったが・・・

「さて、話は纏まつたな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う

織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくよに」「

千冬がそう言つて纏めると、授業が始まったのだった。

第三話（後書き）

わざわざ原作買って読まないと不味いな・・
金使いたくないから中古で買おうと思つけどあるかな?
大学生なのにバイトが出来ないのはキツイ
感想をくれるともつと嬉しいです。

第四話（前書き）

感想をくれた皆様、お気に入り登録をしてくれた皆様
本当にありがとうございます。

皆様方の応援や感想を見ると、本当にこの作品を投稿して良かった
と思えます。

これからも、よろしくお願ひします。

さて、今回の話は、ネタ有り、エロ有り、笑い有り、青春有り、と
様々な劇が繰り広げられます。
ゆえに面白くなると思うよ

では読者の方々、彼ら彼らの織りなす劇を「覧あれ（一ノート風）

押し倒した彼女の一糸纏わぬ裸体が一夏の眼に映る。

上気した彼女の頬

シャープな輪郭の顔

凛とした意志を感じさせる眼

ベッドの上に広がる濡れた黒髪

豊かな胸

ほつそりと引き締まつた体のライン

くびれのある腰

しなやかに引き締まつた脚

それらが集まり一つの芸術品であるかの様な美しさを醸し出していく。

そして田の前の彼女は初夜を迎える生娘の様に

「一夏……」

その瞬間を待つように田を開じる。

話は放課後に戻る。

本日の授業も終わり、授業の復習の為に教室に残っていた所へ

真耶がやつて来た。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。良かつたです。」

「何か？」

えつと、織斑君が生活する寮の部屋が決まりました。

「・・・・自宅通い」

少なくとも一週間は自宅通いと云ひ事を一夏は聞かされていた。

すると真耶は「そりと耳打ちしてきた。

「やうなんですか？ 事情が事情なんで一時的な処置として

部屋割りを無理やり変更したみたいなんです。・・・その辺りの事は政府から聞いてます？」

一夏は首を横に振った。しかし一夏は事情を理解した。

本来なら女性にしか動かせないはずのエスを動かした唯一の男性操縦者

その価値は計り知れないものだ。

入学式になる日まで白毛の前にはマスクがたくさん集まつて来ていたし

解剖させてくれ、体を調べさせてくれ、等と言つてきたマッドまで仕方なしに取材を受けた時の受け答え

居た。

「世界初の男性エス操縦者になつた気持ちは？」
「どうでも良い」

「やはりあのブリュンヒルデの弟と言つた所ですね」

「アーリン、俺は姉の付属物では無い」

「何か一言を？」

「特にない」

「研究をせてくれ！」

「貴様が永遠に呼吸しないで生きていたらな」と最後に変なのが混じっていたが、いつもの調子で受け答えしていた。

「と詰り訳でして、政府の特命もあつて織斑君を寮に入れる事を優先したらしくです。

一ヶ月もあれば個室を用意できるので、それまでは相部屋で我慢してください

ふむ・・と一夏は顎に手をやつてから気がついた。

「荷物は？」

「それなら私が手配した。ありがたく思え

「姉・・織斑先生が？」

荷物などは一週間後から運ばれてくる様になっていたが

「相変わらず、何も無い部屋だったがな・・

「姉・・織斑先生が手を回してくれたらしく

その言葉に真耶が驚いたように千冬に尋ねる。

「えつ、織斑君って私物が少ないんですか？」

「ああ、昔からこいつは必要最低限の物しか持たん。」

「じゃあ、趣味とかは・・・」

「強いてあげるとしたら、料理や家事か？」

「それって一般の男子から離れているんじゃ・・・」

「家事が出来ない姉を持つといつも、ぶツ！？！」

最後まで言い切る前に千冬のチョップが一夏の脳天に直撃していた。

「人の個人情報を漏らすな」

「・・・弟の個人情報は良いのか？」

「お前は私のモノだ。拒否権は無い」

誤解を生みそうな発言である。

現に真耶は顔を真っ赤に染めて、イヤンイヤンと体をくねらせていく。

「・・・不条理だ。」

「弟は姉に逆らってはいけないと決まっている。」

常識だろ？！と千冬は言い放った。

姉が白と言えば何色であるかと、黒と言えば何色でも黒

それが織斑家の不文律であり、絶対の法則

姉と言う座から流れ出た法則である。

『流出：絶対に君臨せし姉』である。

「とにかく四の五の言つても何も変わらん。生活必需品だけで充分
だらう？」

「俺のレシピは・・？」

その言葉に衝撃を受けたかのように固まる千冬

「へへ、不覚…」の私がまさか一夏のレシピを教わるとは・・・

そのレシピには今まで一夏が培つてきた料理だけで無く、

マッサー・ジ等の技術やテクニックまで書き記してある。

正に一夏の技術が詰まつた秘蔵の書である。

別名、シスコン白書

全てが千冬の為に磨き上げた技能であるのだが・・

彼女に養われていた一夏はせめて自分が出来る全ての事をしようつと

彼女の為に出来る事を死にもの狂いで贅得していったのだ。

その話は置いておいて

一夏は真耶から渡されたメモ用紙に書いてある番号の部屋 1025 室へと向かっていた。

部屋に入ると、そこら辺のホテルとは比べ物にならない程の設備だった。

取り敢えず自分の荷物の入ったダンボールを確認した直後

「ああ、同室の者か。こんな格好ですまないな。私は篠ノ之まう・・・
き・・・」

シャワー室からバスタオル一枚の姿で出てきた篠の姿が・・・

「・・・・・」

バスタオルを体に巻いているのではなく、体に押さえつけている状態の為

結構、きわどい所まで見えていた。

まず目に付くのは、バスタオルで隠しきれていない程の豊かな胸の膨らみ

幼少の時に見た幼女の裸では無く

成熟した体つきとアジア系の未熟な顔つきといつ

アンバランスであるが故の魅力があった。

随分と女らしくなった成長したものだな・・

と、約2秒で「」までの評価をした一夏を凄いと詮づべきか

筈は、そんな一夏を見ながら肩を震わせている。

「・・・寒いのか?」

「きやああああああああああああああッ!—!—!」

悲鳴を上げると同時に、筈は部屋に置いてあった竹刀を取り

一夏に向けて振り下ろす。

躲す素振りさえ見せなかつた一夏は、そのまま脳天に一撃を受けて倒れるかに思えた。

が、ここに居る一夏はただの一夏では無い

バシイ!と右手で竹刀を掴んで受け止めると、

勢い良く自分の方へ竹刀を引き寄せる。

同時に竹刀を握っていた筈もそのまま引き寄せられ一夏の胸にダイブする。

その勢いのまま箒を抱き寄せ半回転して、彼女をベッドに押し倒す。

両腕を押さえつけ抵抗できないよつこする。

「落ち着け」

そう言つて彼女の姿を改めて見る。

バサツと幾分か水分を吸つて重くなつたバスタオルが落ちた音が響く

そして冒頭に戻る。

「一夏・・・」

何かを待つ様に目を瞑る箒を見て

流石の一夏も何をすればいいか分かつっていた。

チュツという音が彼のキスした所から聞こえた。

「箒・・・」

彼女の頬から・・・

「ふえっ？」

笄は自分が予想していた場所とは違う所にキスをされて驚いた様にも、残念そうな様にも聞こえる声を上げたのだった。

「落ち着いたか？」

一夏は彼女の顔を覗き込みながら聞いた。

「あ、あつ・・・」

「プス・・プス・・・プシュウ」と先刻と同じ様に顔が真っ赤に染まり蒸気を噴き上げる笄

一夏は顔が近いから話しづらいのだろうと思い、顔を離した。

成熟した笄の体を改めて見ると大人顔負けのプロポーションである事が分かる。

笄の全裸、二つの母性の頂点とか下腹部の成長具合と言つた

本来隠されているべき場所までしっかりと見ていた。

まあ最近では色々と解禁されているから、直接的な描写が無ければ問題無いだろう。

と、一夏がメタな事を考えた瞬間、部屋のドアが開かれ

「なんか凄い悲鳴が聞こえたけど、大丈夫！？」

「何、どうしたの！？」

「何があったの！？」

篠の悲鳴を聞きつけた女子生徒達が突入してきた。

「…………あ…………」

その場にいた全員の声が重なる。

今の一夏と篠の状況を見て、第二三者はどう思つか？

制服姿で全裸の女子を押し倒し、抵抗できない様に腕を抑えている
男子

状況証拠的に言い逃れは出来ない状況である。

「このままでは一夏が性犯罪者となってしまう……！」

と、約0・2秒で判断した篠は無我夢中で口を動かしていた。

「ち、違うんだ！これは……私と一夏の訓練だ……！」

その発言がどれほどの誤解を生み出すのかも知りず……

一夏と篠の親密さは休み時間の様子から、

即座に学園中とはいかないが同学年の生徒たちの間では広まっていた。

そして明らかに性犯罪としか見えない状況で言い訳しているのが男では無く、女の方

それらを加えて彼女たちが下した判断とは

「…………し、失礼しました……どうぞ」

「」

「だから、誤解だアアアアアアアアッ！……」

無慈悲にもドアがバタンと閉められた。

“「それで明日こま、一夏と自分はこいつ仲だと学園中に広まってしまうのだな・・”

そこまで考えた篠は「おや?」と考える。

“あれ?むしろ、これで私と一夏は公認の仲になつたのでは?”

と、乙女的思考回路が神速の如き速度で答えを導き出した。

“し、しかし、なし崩し的に一夏とやつこいつ仲になるのは如何か?”

と、今度は篠の良心が咎める。

“彼女自身は一夏に告白された訳でも無いのに、彼と付き合う事になつても良いのか？”

彼女の中の天使がそう言う

“でも、そうすれば一夏は自分の物だ。”

彼女の中の小悪魔がそう囁く

ପ୍ରମାଣିତ ହେବାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

彼女の中では良識の天使と女心の小悪魔が大論争をしており

文章で表すと大した事が無い様に思えるが

三の本人にしてみれば、壯絶な大戦争が繰り広げられてゐる。

水鉢一ト社と黄金の緑軍の汚難位である

そして事の原因の少年はと詰めると

「明田にでも説明すれば良いか・・

いつも通りのマイペースだった・・・

それを見た途端に彼女の中のDies irae、ラグナロク、
終末の日は

女神で天然で巨乳の金髪碧眼フランス娘に終了させられたのだった。

決して、

育てられた環境のせいで世渡りが上手く

高い人気を誇るいくしてくれる系の男装美少女では無い

部屋の外に出た一夏は笄が着替えるのを待っていた。

少し時間が経つてからドアの向こうから笄の声が聞こえた。

「入れ……」

ドアを開けて、部屋に入ると剣道着を来た笄が立っていた。

その顔はかなり真っ赤に染まっており、体が震えている事から相当な羞恥心に身を焼かれているのだろう

まあ、意中の男に風呂あがりの姿どころか

フルヌードを見られてしまったのだから、無理も無いだろう。

こうして顔を合わせるだけでも、必死で耐えている事が分かる。

対して、一夏は表情を変える事も無く

「すまなかつたな、簾」

深々と頭を下げるのだった。

「…………」

・・・・・沈黙が一人の間を支配する。

未だに頭を下げるままの一夏、何を話せばいいのか迷つている簾

一人の間で時間だけが過ぎ去つてゆく

「とりあえず、頭を上げろ・・・」

簾がそう言つと一夏は頭を上げ簾を見る。

彼女は顔を紅く染めたままだった。

「さつきの事は水に流そう、それの方があ互いの為だ・・・」

「わうだな・・・」

「のままでは何時まで経つても、お互にギクシャクしたままだ。

ならば水に流してしまった方が良い、と簾は考えたのだった。

かなり惜しい事をしたとは思うが、

これから的生活で一夏との仲がギクシャクして話し辛くなるよりは
マシだ。

それに同室で一緒に過ごすならば、まだまだチャンスはある。

“モッピー知ってるよ、一夏はこんな18禁ハプニングでは搖り
がない男だつてこと。”

篠の脳内に座す軍師モッピーは「」の知識を総動員して

状況を判断し、篠にとつての最善の決断を導き出したのだ。

（感謝するぞ、モッピー！）

形容し難い笑みを浮かべるデフォルメキャラに礼を言つ篠

“篠にとつて最善の未来を導くのがモッピーの役目だつて知つて
るよ”

そんな声を残してモッピーは「」内に帰つて行くのだった・・・

一人はとつあえずベッドに腰掛ける。

「お前が私の同居人なんだな・・・

「嫌か？」

何て事も無いよつと聞いてくる一夏に篠は

「別に嫌と言つ訳では無いんだ・・しかし“男女七歳にして同衾せず”と言つだらう?」

軍師モッピーの助言で幾分か素直になつたらし

「ああ・・俺もそう思ひ

だが、と一夏は続ける。

「國からの要請だ。仕方無い」

やはり一夏は大人だつた。

「それに幼馴染であるお前と一緒に方が落ち着く

「そ、そ、う、か、私と一緒にの方が落ち着くのか・・・・嬉しいものだ
な」

そう呟いた篠の笑みはとても優しげで、綺麗だつた。

「何故だ?」

「昔から一夏には助けられてばかりだつた・・・だからお前に頼られるのは嬉しい」

「そ、う、か・・・」

何時しか二人の間には春の陽だまりの様に優しい空気が流れていた。

と、ここまではなにいって話で終わったのだらうが……

ふと、視線を感じた一夏がドアの方を見ると

じ~~~~~と、ドアの隙間から見てくる2女達が
居た。

自分の部屋に戻っていたかと思いまや、最初から見ていたらし

ニヤニヤと一人の甘酸っぱい青春劇をゆっくり鑑賞していたらしい

主に同じ2女である筹の方ばかりだが……

この劇の主役は一夏ではなく彼女の方だつたらしい

「・・・・・鍵をかけ忘れたな」

「…………ああ、つ」

流石に羞恥心の限界を突破したらしい篠は

珍しく可愛らしさの声を上げて意識を手放したのだった。

「篠ノえさんも乙女よねえ・・・」

「…………うそうそ」「…………」

三年生の先輩の一人の言葉にみんなが同意した。

“ やれやれ、だな・・・”

一夏は仕方ないとばかりに篠をベッドに寝かせると彼女の頭を慈しむ様に撫でる。

“ 少しは成長したと思ったが、まだ未熟な子供だな・・・”

まるで彼女の兄か父親の様な事を思いながら、彼は来客者の相手をするのだった。

「…………やから神は意外と恐怖劇以外の演出もするやつ」

第四話（後書き）

はい、どうでしたか？

今回は前回の三倍以上の文字量です！

気づいたらこうなつていたんだ。

一回これ、自動的にやり直しになつたから
はつちやけた文は無しにします。

勝手にコーナートップに戻つた時の脱力状態で今、必死に書いてま
す。

さて次回は、決闘までの日々を短い話で書くか、抜かして決闘を書
くか、悩んでます。

後、詠唱にゲーテやアーサー・ハーバートの詩をそのまんま使おう
と考えてますが

著作権とか、大丈夫ですよね？一応、「コピーしたサイトには違反し
ていたら削除しておきますって書いてあつたから・・

ただ、セシリ亞との対決はある意味、期待を裏切るかもしれません
と言つて置きましょう、だつて、大学の講義中に思いついたんだもの
セシリ亞との決闘は当初予定を変更します。とだけ言つて置きます。
まあ、変わらぬかもしれないんですけどね。

第五話（前書き）

はい、今日は戦闘です。
初戦から創造とかが出ます。
それではどうぞ…！

第五話

セシリ亞との決闘の当日、放課後の第三アリーナ・ピットには一夏と篝が一人きりでいた。

観客席にはクラスメイト達が、管制室には千冬と真耶が居た。

セシリ亞は先にISを展開して、一夏を待ちかまえている。

一夏は篝と共に自分の専用機が届くのを待っていた。

第五話

「来ないな・・・

「ああ・・・」

するとスピーカーから真耶の声が聞こえてきた。

『織斑君、来ました！織斑君の専用IS』

『織斑、すぐに準備をしろ。アリーナの使用時間にも限られているからな、初期化と最適化は実戦でやれ、お前にとって、この位は問題ないだろ？』

ハツチが開き、視界に入ってきたのは“白”だった・・・

「これが一夏の専用機・・・」

『織斑君の専用IS“白式”です。』

純白の機体に触れ、精神を集中する。

“黒騎士の俺が、白騎士を使う事になるとは・・・これも何かの縁
か”

そう思つて、彼は“白式”を装着し一体化する。

“じつくり来るな・・・”

やはり前世での経験がISとの同化に役立つた様だ。違和感が無い

『織斑、気分はどうだ?行けるか?』

「大丈夫だ。行けるさ」

その言葉に千冬は“そうか”とだけ返した。

「一夏・・・・・・」

篝が不安げにこちらを見るが、一夏はカタパルトの方を向く

「行つてくる・・・・」

「ああ・・勝つて來い」

フツ、と笑うとカタパルトから発進する。

「織斑一夏・・・出る。」

黒き騎士は新たな力を得て、再び戦場に羽ばたいた。

嘗て黒騎士と呼ばれし男は、新たな世界で白き装甲を纏い、ここに蘇つた。

アリーナ上空まで上昇し、待ち構えていたセシリ亞を見る。

「あら、やつと来ましたのね。待ちくたびれて仕舞いましたわ」

「それはすまない、HSの搬入が遅れた。」

だが、と一夏は続ける。

「HSの戦には退屈させん」

「あら、たいそつな自信ですわね。」

互いに相手を見据えて、集中する。

『これより、クラス代表決定戦、織斑一夏 対 セシリ亞・オルコットの対戦の始めます。』

真耶の号令と共にセシリ亞が先手を取った。

彼女の持つスターライトMk ？から放たれたレーザーが一夏へと
向かう

「・・・遅いな」

それを身を捩り、紙一重で躲す一夏

「さあ、踊りなさい！－！」この私とブルー・ティアーズの奏でる円舞^{ワル}曲を！－！」

続けてレーザーが襲い掛かってくるが、全てを紙一重で躲し続ける。

「遅い、遅すぎるな・・・」

彼にとつてレーザーの速度は、光速であるのにも拘らず慣れてしまつている。

前世に於いて約五十年間もの間、マキナは魔城で一人の騎士と訓練をしてきた。

その片割れである白騎士の称号を持つ少年：ウォルフ・ガング・シュライバー

彼の能力は絶対先制加速、これによる速度の上限は無い

故に彼は光速の相手であつても、その上を行く神速の速さとなる。

そんな超加速能力を相手にしていれば、嫌でも速さに慣れる。

まあ相性上、彼は一度も攻撃を当てる事は出来なかつた訳だが・・・

馬鹿げた速度に慣れてしまっているが故に、高速対応が可能な反射神経なのである。

体は一夏であるが、最近になつて音速までなら完全に対応できる様になつた。

流石にレーザーの光速には対応できないうが・・

“ まだまだ、射撃も未熟だな ”

中身が歴戦の戦士である一夏は、彼女の射撃をそう評した。

「 棒立ちでは、相手の射撃兵器の的だぞ？」

悠々綽綽と一夏は彼女の欠点を述べながら、高速移動で彼女の横へと回り込む

そして近接用ブレードで切りかかる。

「 くつ！？ 」

間一髪の所で回避したセシリ亞は一夏から一寸距離を離す。

まさか、接近を許してしまつとは思つてもいなかつたセシリ亞は本気で一夏を倒そうとする。

「 貴方が初めてですわ。ここまで私の攻撃を避けたのは。

その貴方に敬意を表して全力で行かせて頂きますわ！」

ブルーティアーズの肩の装甲から、四機のビットが射出される。

「む・・・」

それぞれが別々の方向から一夏に向かつてレーザーを放ち始めた。

それすらも躲してゆくが、

その内の一撃は躲しきれ無いと判断したの一夏は右手のブレードで叩き切つた。

「なッ！？」

まさかレーザーを叩き斬るなんて非常識な真似をするとは思つていなかつたセシリシアが

驚きの表情で一夏を見た。

「まだ、戦いは始まつたばかりだ・・全てを見せてみるがいい」

まるで、彼女を試しているかのように言い放つ一夏

その眼は、まだこの程度ではないだろ？？と語つている。

「いいでしょ？、この私、セシリシア・オルコットの全てを貴方に見せてあげますわ！――

セシリシアは口の全てを一夏へ見せつける為に戦う

“未熟だ。・・・ならば、この戦いを教訓に出来るものへと変えて

やひつ”

一夏は先生的な事を思いながら、彼女の円舞曲に付き合ひつのだつた。・

・

モニターでそれを見ていた筈は一夏の行動に疑問を持っていた。

「何故、追撃しなかつたんだ・・・？」

一夏がセシリ亞を切り付けた直後に、追撃していればダメージを『えられた筈だつたのだ。

「多分、オルコットのワルツに付き合ひつもつなんだひつ・・・」

千冬が筈の質問に答える。

「どうしてですか？早く決めてしまえば良いと思わないんですか？」

真耶が不思議そうに聞いてくる。

「あいつは戦士だ。戦いの中でオルコットを教育するつもりなんだ
ひつ・・・」

「教育つて・・オルコットさんは代表候補生ですよっ！」

「だが、実戦の経験も無く、戦場を知らない

“私もだがな”と付け足して真耶の疑問に答える千冬

「では、織斑君には戦場の経験があるんですか！？」

「いや、無い筈だ・・だが、あいつは明らかに戦場を、闘争を知つてゐる。」

そう言つた千冬の表情はどうか悲しげであった。

試合開始から十分後・・・

セシリアは自分の胸の内の変化に戸惑つていた。

彼の戦士として眼に男を感じ、胸が熱くなるのはどうしてか？

自分を見守るような父親の様な眼に安らぎを感じるのはどうしてか？

“自分の胸の内を焼く、この感情は何だ？”

数瞬の後、彼女はその答えに思い至る。

“ああ、そうですのね・・・この感情が恋と恋つものなのですね・・

・”

己が内に芽生えた感情は、自覚した途端に更に激しさを増しながら

燃え上がる。

彼に自分の全てを見て欲しい・・・そして、その全てを受け止めて欲しい、と

この時、セシリア・オルコットの中に生まれた想いは確かに渴望だつた。

そこに水銀の手が加われば、永劫破壊の術式はここに完成する。

“さて、彼女が語るのは道を求める物か？道を霸する物か？”

彼女の口から語られるのは、己が渴望の具現化

一夏の眼が僅かに驚愕で見開かれる。

Love bade me welcome: yet my soul drew back,

愛は私を喜んで招き入れてくださった、だが私の魂はしり込みしていた

Guilt of dust and sin.

塵と罪に汚れていたからだ

But quickly d'love, observing
me grows slack

だが慧い眼をお持ちの愛は、私がぐずぐずしているのを見ておられた

From my first entrance in,

私が初めて戸口に入った時から

Drew nearer to me, sweetly questioning,
I flack'd anything.

私に近付いて、やせじくおたずねになつたのだ

If I lack'd anything.

客人が、私は答えた、ここにふさわしくないのです

Aguest, I answer'd, worthy to be here:
何か足りないものがあるのか?と

Love said, You shall be here.
愛はおっしゃつた、お前がその客人になるがいいと

I the unkind, ungrateful? Ah, my dear,

私のような薄情で恩知らずな者がですか?ああ、わが愛しきお方よ

I cannot look on thee.

私はあなたを見つめることもできません

Love took my hand, and smiling
did reply,

愛は私の手を取り、微笑んでお答えになつた

Who made the eyes but I?

私でない誰がその目を作つたというのだ?

Truth, Lord, but I have marred
hem: let my shame

真実です、主よ、ですが私はそれを汚してしまいました、私の恥に

Go where it doth deserve.
しかるべき報いを受けさせてください

And know you not, says Love, who
bore the blame?

お前は知らないようだな、と愛はおっしゃった、誰がその責めを
負つたのかを？

My dear, then I will serve.
わが愛しきお方よ、それではお仕えしましょう

You must sit down, says Love, an
d taste my meat:

お座りなさい、愛はおっしゃった、そして我が肉を食べるのです

So I did sit and eat.

そこで私は座り、いたいたのだ

Creu

創造

Seren golau dydd teimlad syrth
io mewn cariad

星光降り注ぐ、恋慕心情

彼女を中心に異界が展開される。

しかし、世界が灼熱の世界に変わる事も無ければ、紅い月が照らす夜になる事も無い

だが、彼女の世界が生み出された事だけは確かであった。

「織斑さん・・・いえ、一夏さん・・・私の全てを受け止めて下さいな」

熱っぽい声で愛しい彼に告げた彼女は、同時に蒼き雲達を一斉に放つた。

「一夏はそれを油断せずに回避しようとする。が・・・

「言つた筈ですわ、全て受け止めてと・・躲そつとするなんて酷いではありませんか」

彼女がそう言つた直後、蒼き雲達から放たれたレーザーが拡散した。

まるで雨の雲の様に丸く小さな光の弾が、豪雨の如く彼に降り注ぐ

!!

「――ツ――」

最大出力で急速上昇し、雲の弾幕から脱出するが

全てを躲しきれず、装甲が豪雨に降られシールドエネルギーを持つて行かれる。

「――くつ！――」

一撃一撃の威力は大した事無いが、それが豪雨の如く降り注いでくるのだ。

完全に躲す事など、あの千冬ですら難しいだろ？

だが弾幕を何とかやり過ごした一夏はそのまま彼女へ向かつて行かが・・・

「・・・だから言つた筈ですわ。全て受け止めて欲しいと――」

次の瞬間、背中に豪雨が降り注いだ。

「ぐわッ！――！」

突然の衝撃に落下してしまう一夏だが、すぐに体制を立て直す。

“ そういう事が・・・ ”

一夏は理解した。

彼女の渴望は“自分の全てを受け止めて貰いたい”と言つ霸道である。

つまり、当たるまで追い続ける大量の弾幕

レーザーが拡散して小さな零の様になつたのは、全て受け止めて欲しいものと言う事から

四つでは足りず、表現しきれないと言つ事だ。

その眼は久しぶりの窮地に焦りと樂しみを感じている事で輝いていた。

“ つべづべ、自分は戦つ事に向いていぬりしな・・・・・”

自分は戦いの運命に戦わずに生きてゆく事は出来ないらしい

次の瞬間、一夏を包み込むようにして、レーザーの弾幕が襲い掛かつた。

その頃、管制室でも騒然としていた。

「レーザーが拡散した！？」

真耶が驚愕の声を上げる。千冬も驚いたような表情をしている。

更に一夏が飛び越して躲す。

するとレーザーの弾幕はとんでもない速度で曲がり、彼の背後から直撃する。

「一夏ッ！－！」

篝が思わず声を上げた。

「馬鹿な・・・いくら偏向射撃が理論上可能とは言へ、あの曲がり方はあり得ん・・・」

「で、では、あれは一体・・・？」

幕の言葉に千冬も考える。

すると、クラスメイトの声が千冬の耳に入ってくる。

「セシリアさん、凄いね。」

「でも、あの詩って何だろ?」

そこで彼女は思い至る。

「まさか・・・あの詩を詠つ事で発動する单一使用能力なのか・・・？」

「そんな・・・まだ一次移行でも無いのに单一使用能力の発現なんてあり得るんですか!?!？」

真耶の言葉に、さあな、と千冬は返して続ける。

「EVAはまだ謎が多い、あれが何であっても真実は分からない」

そして彼女はモニターに映る弟の姿を見る。

“じゅやひ、田まだ死んでいない様だな・・・”

その表情は凜々しく、見る女、全てを引き寄せる魅力があった。

“自分ですら魅力を感じるのだから”と思いつつ、他の連中に目を向けると・・

篝は頬を紅くして王子様を見る眼をしているし、隣にいる副担任も同じ様な目をしている。

“相変わらず罪作りな奴だ”

千冬はフラグ野郎の弟を見て溜息をつくのだった。

このままでは負けるだろ？が、時間的にそろそろだろ？

すると、彼を包み込むようにローザーが全方位から襲い掛かった。

「一夏ッ……！」

篝が再び彼の名前を叫ぶ。

逃げる事も防ぐことも不可能な必中の攻撃に包まれた彼は墜ちるのか？

“それでは面白く無いだろ？？”

英雄とはどんな強敵にも決して負けず、最後に勝利を掴む。

それこそが英雄譚なのだから

織斑千冬はフツと笑つて言った。

「機体に救われたな。馬鹿者め」

モニターには白ではなく黒に染まりし、騎士の姿があつた。

「一次移行！？・・まさか、今まで初期設定で戦つていたのですか！」

セシリシアが驚いた様子で彼に聞いてくる。

どうあっても、自分は黒騎士である事は否定できない様だ。

そして、その手に展開された武器は姉が使っていた物と同じだ。

「俺は最高の姉を持つた。

幼き俺を必死で養い、栄光よりも俺を選んでくれた最愛の姉だ。

あの時に、俺は彼女を支える事を誓つた！――

だからこそ、お前を倒す！

見せてやる。この俺を！――！」

黒き装甲を纏つた彼は彼女を本気で倒すこととした。

「…………」

千冬は体を震わせながら涙を流していた。

「…………千冬さん。どうぞ」

「…………すまない」

筹からハンカチを受け取ると溢れてくる涙を拭く

「いい弟さんを持ちましたね」

「ああ、いつも泣き言ひとつ言わずに、グスッ……私を支えてくれた
・・グスッ・・・弟だ・・・」

だが、彼女は更に涙を流すことになる。

一 夏は詠つ、嘗ての渴望とは違つ渴望の一つ

Es ist unsere Liebe, Ich liebe dich, Ich will dich untersetzen

— 我が愛しき者よ、私は貴方を愛し、貴方を支えたい

Du untersetzttest mich lange .

— 貴方は、私を長い間支えてくれた。

Du gabst mir alles , um mich zu unterstützen .

— 貴方は私を支える為に、全てを私に捧げてくれた。

Ich unterstützte dich dieses Mal .

— 今度は私が貴方を支える番だ。

Gib diesen Körper , alles ,

— いの身を全てを捧げて

Widmen wir sich dir .

— 貴方に尽くそう

— Brian

— 創造

— Ich gebe eigenen Weg Die Welt des Bruders

— 我捧ぐ・姉弟世界

それは最愛の人の為に出来る事を全て行いたいと言つ渴望から生まれし求道

その力は万能化、ありとあらゆる物全てを使いこなす事が出来る能力

「は、ははははは！…素晴らしい…素晴らしいですわ！…一夏さん！」

初期設定で私を苦戦させただけで無く、

一次移行で単一使用能力を発現させるとは…

やはり、貴方は最高に素敵ですわ！…あ、もつとの^{ワルツ}の芭舞曲を
楽しみましょう！…」

セシリ亞の表情は歓喜に満ちていた。

自分の惚れた男は、これ程までに強さを示し、屈する事無き誇り高さを見せている。

“ならば全力を以つてして、全てを受け止めて下さこ…一夏さん…！”

また一夏も熱烈な視線に眼で答える。

“お前の全てを受け止めてやる”

蒼き雲達がセシリ亞の周囲に集つ

セシリ亞自身もレーザーライフルを構える。

円舞曲の終曲を飾るに相応しい一撃

“さあ、受け止めて下さい……これが私の全てです……一夏さん！”

放たれし全てのレーザーは拡散し、再び収束して一つの極光を生み出す。

それを受け止めるべく一夏も又、正面から突撃して躲す事などしなかつた。

“单一使用能力：零落白夜、発動！！”

巨大な極光の奔流の中を一夏は剣で切り裂きながら突き進む

「—————ッおおおおおおオオオオオオオッ—————！」

咆哮を上げながら、スラスターの全開出力で突き進む。

「セシリ亞・オルコットオ……」

極光の先に待ち受けた彼女の姿を、その瞳に捉える。

そして極光を突き抜け、所どころが融解した剣を捨て、彼女へ一撃を放つ！！

「これが！織斑一夏だアアアツ！！！！！」

彼の放った拳と、彼女が最後に放ったミサイル

そのどちらが早く到達したのかは、言つ必要はないだろ？

「何が、これが！織斑一夏だ！！」だ。負けたじゃないか……

保健室で簞に看病してもらひながらベッドの上に寝て一夏

「そうだな……」

最後の一撃を放った時、確かに一夏の拳は届いた。

だが最後に放ったセシリ亞のミサイルの爆風が一夏の拳の狙いを僅かに逸らし

本当にギリギリの差で負けたのだ。

0・1・0の差で……

やはりレーザー四発分の直撃を受けたのがいけなかつたらしい

「悔しいな・・・」

「やつか・・・」

「ああ、そうだ。と一夏は言つ

「必死で力を求めた癖に、敗北した・・・それだけなら許せる。

だが、姉さんの同じ力を使つておきながら敗北した。

俺は姉さんにまた恥をかかせた・・・

相当、悔しいのだろう。握られた拳の色が変色して白くなっている。

あるとこく・・・

「何を言つているか馬鹿者」

「姉さん・・・」

千冬がやつて來た。

「こつも、お前は自分を責める馬鹿者だ。」

「う・・・」

千冬に責められて、しょんぼつする一夏

だがな・・・と千冬は言つ

「お前が必死で私の為に努力してきたことは知っている。」

「…………」

「だから少しばかり自分を許してやれ……」

「ううん、千冬は一夏を抱きしめた。

「…………ありがとうございます」

「構わなさい、充分すぎる位お前は泣いてくれた。その礼だと思え」

そのまま一夏は安心したのか、千冬の胸の中で眠ってしまった。

「千冬さん……」

「織斑先生だ……後は頼んだぞ？」

「はい……」

一夏を千冬に託した千冬は保健室から去つて行ったのだった。

千冬は安心したような表情で眠る一夏を撫でながら、思つ。

“お前はお前は何時まで経つても千冬さんの事しかないのだな……”

何時か、そこに自分も入つて見せると誓つた彼女は、

自分も強くならなければと思つのであつた。

何処かにある研究室の一室に彼女はいた。

「あははははは！－－これは凄いね－－まさか、これ程の事が出来るなんて！」

HSの開発者、篠ノ之束はディスプレイに映る光景に興奮していた。

「『U』の渴朥を世界へ戦闘用に具現化して、現出せらるなんてセ・・・

非科学的にもほどがあるよね、と束はいぢつる。

「Uのセシリアって娘の渴朥は、レーザーを拡散と収束まで自在にしているし、

おまけに追尾性能まで付いちやつてるなんてチートもいいとUだよ・・・」

すると、束の背後から影法師の様な男が現れた。

“如何かな？彼女等が演じた歌劇の程は・・・”

“私の予想以上だよ、胡散臭くて最初は信じられなかつたけどね・

・

“ふむ、頬がそう評するならば、私が手を加えただけの甲斐があつたと言つものだよ”

「やりと影は語る。

「でも、この創造つて言つのは、誰でも使えるんだよね？」

“然り、君が使いたいと書つのならば、君に下さえる事も出来るが？”

「ふうん・・じやあ、今度頼もうかな・・」

“では、自分の内に眠る渴望を理解する事だ。それまでは私も舞台にいるとしてよう”

そう言い残すと影は消えて行つた。

「そうだね・・貴方が出でくるのは舞台の最終章・・・・・

そしてその時こそ貴方の願いを叶える時

“さうだよね、メルクリウス？”

束の、その言葉はどこか暗い闇の中へと消えてゆくのだった・・・・・

第五話（後書き）

セシリ亞の創造に使つた詩はジョージ・ハーバートの詩
「愛は私を喜んで招き入れてくださつた」です。

前回のあとがきで、名前間違えました。

一夏の創造はオリジナルの詩で翻訳サイトを使用しました。
能力はゼロの使い魔のガンダルーヴと同じです。
武器以外にも適応されるというのが違いますが・・・

そして、最後にまさかの二一ト登場

ISコアに永劫破壊の術式を仕組んだのもコイツです。
束がISを開発した時期に登場して関わっています。

これからどうなつてゆくのか?
それはこれからのお楽しみです。
ではこの辺で・・・

第六話（前書き）

はい、ASTです。ちょっとカプセルガンダムにハマッいていました。
遅れています
中国娘の出番は次回にしました。
では、第六話です。どうぞ

第六話

「と、いつ訳で一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。
・・・あ、一”繫がりでいいですね」

試合の翌日、朝のホームルームで真耶がそう言つた途端

教室中から歓声が沸き起つた。

第六話

「・・・・何故だ？」

不思議そうに一夏が真耶に聞く

自分の記憶が正しければ決闘に勝つた方が代表になるといつ事だつた筈である。

「それはですね「それは私が辞退したからですわ！…」・・・」

答えようとしたら、その上から勢い良くセシリアが答えたので、涙目になる真耶

「勝負は確かに貴方の負けでしたが、私とほぼ引き分けの僅差に

持ち込んだのですから・・・

セシリアは咳払いを一つしてから続ける。

「それで、私も大人気無かつたと反省しましたので・・・」

彼女は一夏ににっこり笑いかけると

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。

IS初心者であれ程の実力ですのでクラス代表になつて実験経験をつみ重ねていけば、

国家代表も夢ではないと思いますの」

そこでセシリアは頬を少し赤く染めながら一夏を見て言いつ

「そ、それでですわね・・私のような優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が操縦を教えれば、それはもうみるみる内に成長を遂げて――」

「生憎だが一夏との訓練相手は私だ。」

そこで笄が立ち上がり、セシリアを睨んで牽制する。

「どうやら」女の勘が、彼女を明確なライバルだと認識したらしい

しかし彼女も怯む事無く、笄を余裕の田で見る。

「あら、誰かと思えばエランクの笄ノエさんでは無いですか。

「ランクAの私に何か御用かしら?」

「う、ランクは関係ない! 一夏の相手は私だ。一夏にじどりしてもと頼まれたからな・・」

実際は一夏がどうしようか・・と考えていると彼女が一緒に訓練してやううと半ば強引に誘つた結果である。

一夏自身も訓練用T.Sが無いから、籌の誘いに付き合つたのだ。それは良いとして、一人の頭からバシン!バシン!と打撃音が響き渡つた。

出席簿を片手に現れた千冬が、頭を抑えて悶絶する一人に言つ

「座れ、馬鹿共」

そして、彼女は言つ

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしてみれば団栗の背比べだ。まだ殻も破れていない段階で優劣など付けようとするな。」

「イツみみたいな規格外ランクの奴でもだ。と、一夏を指して言つ

千冬

ちなみに一夏のランクは規格外のS.Sである。

これは千冬のSランクを超えて、計測不能レベルの適正值に暫定的につけたランクである。

つまり一夏は世界一の適正値を持つてゐるのである。

「代表候補生でも一から勉強してもひひつと前に言つただろう。

下らん揉め事は十代の思春期の特権だが、生憎今は私の管轄時間だ。
自重しろ。」

厳しく表情を引き締めて言つ千冬に一夏は

（流石だな・・・）それで私生活もしっかりしていれば良いのだが・・・

そんな事を考へて一夏は千冬がこちらを向いた。

「織斑、今何か無礼なことを考へただろひへ。」

ギロリと睨んでくるが、一夏は平然としていた。

「・・・完璧な存在など、この世界に在りはしないと考えただけ・・・
です。」

相変わらず、ぎこちない敬語だった。

「そうか・・・」

ズバーン――

「すいませんでした。」

「分かれば良い」

千冬はフン、と鼻を鳴らしてから宣言するように言つ

「クラス代表は織斑一夏。依存は無いな？」

ここに一夏がクラス代表であるが決まったのだった・・・

その後、ISを装着する為に一組の生徒全員がISスーツを着てグラウンドに居た。

ISスーツは簡単に言えばスクール水着に似ている為、健康的な太腿とか見事に露出しており、男である一夏の視線を気にして恥ずかしがっている者も居たが・・・

当の一夏本人は腕を組んで立っているだけで、女の肌に興味は無いとばかりに無関心だった。

その様子に残念そうにしている一部のクラスメイトが居たのだった。

「それでは、ISの飛行訓練を開始する。織斑、オルコット、ISを開幕しひ

一夏は待機状態にある「」のISに手をやる。それは黒きガントレットであり

その外見は『人世界・終焉変生』だった。

“ 本当に、これも何かの縁か・・・ ”

「 何を待けている？ 早く展開しろ 」

ふと氣づくとセシリアは既に展開している。

千冬に急かされた一夏は腰に腕を置いて肘を横に突き出す。それは押忍！の格好に近い

「 — Yetzirah 」

次の瞬間には黒い装甲を纏つた一夏がそこに居た。

「 よし、飛べ 」

その言葉と共に砲弾の如き速度で上空に飛び上がる一夏、それに続いてセシリアも優雅に飛んでいる。

ある程度の高さにまで上昇すると一夏は宙返りして待機する。

「 流石ですか、一夏さん。 」

何処か嬉しそうにセシリアが話しかけてくる。

「 いや、それ程でもない・・・ 」

素っ気無く返したのだが、その会話を快く思わない者がいた。

「 では、今度一人生りで一緒に訓練を、一夏、何時までそんなとこ

ろにじるー早く降りて来いーーー。」「

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、地上に田をやると
篝が真耶からインカムを奪っていた。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せ。田標は地
表から十センチだ。」「

千冬が篝に拳骨を振り下ろして言つ

「了解しました。では一夏さん、お先に。」「

そう言つてセシリアは一気に加速して急降下し、一気に減速して完
全停止をしてクリアした。

“流石は代表候補生と言つた所か”

そつと思いつつ、一夏も急降下を開始する。

急速度で地上へと降下して行く、そして地表ギリギリで轟音と共に
止まる。

「・・・確かにクリアはしたが、その方法は止めろ」「

千冬が言つたのは、地表寸前で一夏は一気に拳を突き出し拳圧で速
度を相殺したのだ。

普通の人間が出来る事ではない。一夏だから出来るのだ。

「まあ、良い・・・次は武装展開だ。」「

千冬が一夏の前に立つ

「では、やつてみる」

一夏は何も言わず、ただ無言で拳を前に突き出し雪片式型を展開する。

「これ位は問題無いか・・次はオルコットだ。」

「はい」

セシリ亞は真横に左腕を肩の高さまで上げる。

「ふむ、流石は代表候補生と言つた所か・・ただしオルコット、そのポーズは止める
誰を撃つつもりなんだ?」

「で、ですが、これは私のイメージにまとめるのに必要な――

「直せ、いいな」

「はい・・・」

流石のセシリ亞も千冬には逆らえず、ただ返事をするしかない様だった。

「次だ。オルコット、近接武装を出せ」

「は、はい」

返事をしたものの、中々で展開されない

「まだか？」

「い、いえ・・。ううん・・・。ああーもう、“インターセプター”！」

うまくイメージ出来ない事に痺れを切らしたセシリアは、初心者コースのやり方でショートブレードを展開した。

これは代表候補生たるセシリアにとつては屈辱だらう。

「何秒待たしている。実戦で相手は待つてくれないぞ？」

「・・・頑張ります。」

「分かれば宜しい」

この様に本日の授業は行われたのだった。

夕食後の自由時間、一年一組のクラスメイト達による『織斑一夏、クラス代表就任記念パーティー』が開かれていた。

「と詠うわけで！織斑君クラス代表おめでとう！」

「「「「おめでとう～～～～～～」」」

「…………ああ

一夏はパーティーの中心で、クラスメイト達から次々と祝いの言葉を送られていた。
いつもの如く、ぶつきりぱうな返答に無表情といった様子だが、彼女達の気持ちを無下には出来ないらしく、ちやんと会話に付き合つている。

その様子を見て、篠は不機嫌そうに茶を飲んでいる。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ましたーーー！」

オオ～と盛り上がる一同、学生だけあってノリが良い様だ。

「あ、私は一年の薫薫子。よしそくな。新聞部副部長をやってます。ハイ、これ名刺

「…………どうも」

「ではでは、ずばり織斑君、クラス代表になつた感想をどうぞーーー！」

「…………特に無い」

「え～、もつと奥のコメント頂戴よ～～案ずるな、私は負けん！！
とか」

お前はどうやら黄金的な台詞を求めるのかよ～～と突っ込みたいが
気にしないで置こう

一夏はマキナだ。マキナがそんな事を言つなんて無理にも程がある。

「……言葉で飾る必要など無い」

「おお……ハードボイルド……」

一夏は言葉では無く、行動と背中で語る漢なのだ。

「じゃあ、仕方無いから適当に捏造しておくから良ことって……セシリアちやんも何か「メントを」

「私、こいつた「メント」はあまり得意ではないのですが……」

「うん、ながりも、満更じゃないからしてこのセシリア

「では、まずは、一夏さん代表を譲ったのかと」

「あ、長そつだから、[写真]だけで良いわ。」

「ちゅーーー？」

「クラス代表を譲った理由も、織斑君に惚れたからでこいよね？」

「なつーーなななな……」

セシリアが真っ赤になつてプシューと蒸氣を吹き上げる。

「ああ、織斑君、セシリアちやんとのシーショットが欲しいから並んで?」

「構わん」

そこで一夏はセシリアの横に並ぶと・・彼女の肩に手を回した。

「い、一夏さん！？」

「ぬあつ…？」

「「「「「「おお～～～～～～～～～～～～～～」」」」」

「これ位のサービスはする。」

クラスメイトからは歓声が上がり、幕からぎりぎりと悔しそうな表情で睨んできている。

「やるねえ、織斑君。君つて中々のプレイボーイ？」

「そんな訳あるか」

「じゃあ、撮るよ～、 $35 \times 51 \div 24$ は～？」

「・・・知るか」

「正解は74・375でした～」

直後にシャッターが切られるが、フレームに収まるようにクラスメイト達が入つてくる。

「・・・何故入つている？」

“ まさか、 篠までもが一緒になつて入つてくるとは・・・ ”

獣殿もびっくりのチームワークである。

「 あ、 貴方達ねえ！ ！」

「 セシリアだけ駆け抜けはないでしょ～？ 」

「 ま～ま～ 」

「 クラス全員の思い出になつていいじやん 」

「 わ～い、 おりむ～に、 いのつちと『 真～ 』 」

「 先輩、 後でその『 真くださいね 』 ～ 」

“ 全く、 子供だな・・・ ”

一 夏はそんな事を思いながら彼女達の見ていたのだった。

その後、 セシリアの肩を抱いたことに対する篠の嫉妬に、 頬へキスすることできち着いた。

が、 ズルイと言つセシリアを含めたクラスの声に

一 夏は仕方なくクラス全員の頬にキスする事になつたのだった・・・

結局この馬鹿騒ぎは夜十時まで続けられ

その間に一夏は数え切れない位、クラスメイトの頬や額にキスをしたのだった・・

流石に“唇にしてくれ”と言つ者は、同じ乙女達によつて阻止されたが・・

それでも既、その口はとても満足せりとしていたのだった・・・・

第六話（後書き）

はい、一夏君の鈍感振りと父親的スキルの発動です。
すごいですね一夏、クラスメイト全員に唇ではないとは言え、何度もキスします。しかし、一夏自身は家族や友達に対するスキンシップの様なものと考えているので、性質が悪いです。

設定集（前書き）

これまでの~~前書き~~設定集です。

ふむ、この舞台裏を見に来るのは、君も中々に奇特な・・・いや、知識欲が旺盛な人間なのかな？

・・まあ良い、大したものでなしは出来ないが、ここを見に来たのだから、精々楽しんでくれたまえよ・・・フフフ・・・

・織斑 一夏

前世はDies iraeの聖槍十三騎士団・黒円卓第七位ゲツツ・フォン・ベルリッヒンゲン

通称マキナと呼ばれていた英雄ミハエル・ヴィットマン
腐れ二一トことカール・クラフト・メルクリウスとの戦いで何の偶然か円環から弾き出されて、気が付けば織斑一夏として生まれていた。

性格は前世のままで、寡黙でぶっきらぼうに話す。

織斑一夏という存在の影響を受けており、困っている人を見捨てることはしない

言葉にせず行動で表す人間、背中で語るハードボイルド、しかし衬衫スコン。

前世の影響か、人間離れした身体能力を誇る。

剣道も天童と称されるほどの腕前だが千冬には及ばない素手での格闘においては比類なき強さを誇る

剣道も手加減しきれない格闘の代わりに学び始めたもの、素手でコンクリートを碎き、鉄骨を折り曲げる。

千冬を支える為に生まれた時から自分に出来ることを必死でやつてきた。

第一回モンド・グロッソで誘拐され、千冬が決勝戦を棄権して助け

に来てくれた事は

彼にとつて最大の忌まわしい記憶である。

元々養つてくれていた事に感謝していた一夏は、この事件がきっかけで千冬への想いや感謝が増し、シスコン度が増した。

学校でもハードボイルドな雰囲気から友人は少なかつたが、無自覚にフラグを立てる。途轍もなくモテる。

一部では同性愛者か、不能か、とまで言われる程、色恋に興味が無い実際には色恋に興味が無い訳では無いが、千冬優先の為に構つている暇は無いのが実情である。

千冬に対する感情は、殆ど感謝、恩義、罪悪感、といったものだと思つてゐるが、恋愛感情も多少含まれてゐる。

専用ISは白式

- ・白式

一夏のISだが、どうもニートが余計なお節介をしてくれたおかげで、外見が一次移行の際に黒く染まり、本来と单一使用能力が変わつていて。

单一使用能力は零落白夜なのだが、一夏曰くこれは不完全な单一使用能力の発現らしい

一夏自身はこれを両腕部分のみを部分展開して使うことがある。更に量子化の応用による禁断の技があるがリスクが伴う

創造は“ Ich gebe eigenen Weg Die Welt des Bruders 我捧ぐ・姉弟世界”

これは一夏の渴望の一つである“最愛の人の為に出来る事を全て行いたい”と言う渴望から生まれた創造である。

効果はあらゆる物を使いこなす事が出来る様になる。それが武器であらうと、楽器であらうと、器具であらうと達人級の技量で行える。

意外と実用性は高く、日常生活にはもつてこいの能力、種類は求道型

。

・篠ノ之 篇

設定は原作と変わりないが、幼い頃の一夏の行動から新密度や愛情は高い、姉の束がIISを開発した事で家族が散り散りになり、一種の呪いの様な物だと感じている。

別れる際に掛けられた言葉で一夏に対しての想いは常に烈火の如く燃え続けていた。

素直になりにくい幼馴染系クールシンデレ

幼い頃に一夏から慰めのキスを貰い、それ以来事ある毎に頬や額にキスして貰つたり

綺麗になつたと褒められたりと、意外といいポジションにいる。

同年代のヒロインの中では好感度が一番高い

一夏に裸を見られたり、押し倒されたりと何かしらの18禁的ハプニングに見舞われる。

・セシリア・オルコット

設定は原作と変わらず、幼少期の体験から人を見下す事がある。プライドが高く、金髪縦ロールの髪型と、正にお嬢様キャラの一つを体现した存在

男である一夏を見下し、対立して決闘を行う事になり、戦いの最中に一夏の誇りや心の強さに惚れる。

イギリスのIIS国家代表候補生であり、学年の中ではトップクラスの技量を誇る。

・ブルー・ティアーズ

セシリアの専用IISであり、第三世代型のIISである。特殊遠隔実験兵装“ブルー・ティアーズ”を六基搭載しており、実験機としての割合が強い

タイプ的に後方支援機であり、射撃に特化している為、接近戦となるとショートブレードの“インターセプター”しか無いので苦戦す

る。

ISのコアにメルクリウスが簡易版エイヴィヒカイトを仕込んだために、創造が発動可能

創造は

“ Seren golau dydd teiml ad syrth
hiomewn cariad 星光降り注ぐ、恋慕心情”

これは彼女の渴望である“自分の全てを受け止めて貰いたい”という渴望をから生まれた創造である。

効果はレーザーを雨粒の様に拡散させたり、収束させて一つの巨大なレーザーにしたり出来る。更にレーザーは相手に当たるまで追尾し続ける。

欠点としてはレーザーの燃費が酷くなり、二十発程でエネルギーが切ってしまう点である。種類は霸道型

・織斑千冬

織斑一夏の実の姉であり、世界初のIS操縦者でもある。ISの開発者、篠ノ之束とは幼馴染の親友である。

ISの世界大会、第一回モンド・グロッソ優勝者であり『ブリュンヒルデ』の称号を持つが本人はその名で呼ばれる事を嫌っている。高校生の時に親が蒸発した為、幼い一夏を学生の身で育てた苦労人である。結構ブラコンが入っている。

性格はクールで凜々しく、即決即断と言つ行動方針であり軍人に近いが、心優しい一面も見せる。

能力が総じて高く、あらゆる事に対してもの才能に恵まれていた。しかし家事関連の事は全く駄目である。

IS学園の教師をしており、厳格な鬼教官であるが、私生活はだらしない

設定集（後書き）

キャラクターの設定や説明が出来次第、追加していきます。

外伝 もし一夏が獸殿だつたら・・・（前書き）

はい、思いつきで書いてみました。

上手く獸殿」とハイドリヒ卿を書けているか不安です。

これは小説本編とは関係ありません。

あくまで、もしもの物語です。

外伝 もし一夏が獸殿だつたら・・・

「織斑一夏だ。よろしく頼むぞ。麗しき乙女達よ」

IFS学園に入学したのは、日本人でありながら黄金の瞳に黒髪の様な長髪を持つ男だった。

その容姿は正に人体の黄金律と呼ぶにも、芸術品と呼ぶのにも相応しかつた。

人間は本当に感動すると何も言えなくなるらしい・・・

外伝・もし一夏が獸殿だつたら・・・

「久しぶりだな、篠。六年振りか・・・」

「ああ・・・貴方は相変わらずだな」

「ふつ・・・人はそう易々と変わりはせんよ」

「その口調も変わらないな・・・」

「ああ、だが卿は美しく成長した。そう、幼かつた薔が花開く様にな」

「や、そつか・・・」

「つむ、卿と語り合つ事は多いだらうが、この時間で語り尽くせるものでは無からう。」

黄金はかつて別れた第一の幼馴染と再会する。

「決闘ですわ！！」

「良かれ、代表候補生たる卿の力を見せて貰おうか

黄金は、英國の令嬢との決闘に挑む

「愛せよ『破壊の君』」
ハガルクオーツ

黄金は薦ての神槍を鎧として身に纏う

「な、何故、私の攻撃が通用しないんですのーー？」

「愛が足りんよ、セシリア・オルゴット」

超然とした笑みを浮かべ、黄金は不動の構えをとる。

「では、卿を愛せつ—— Yetzirah

彼の手に黄金の神槍が現れる。

蒼き雲を身に纏つ令嬢は黄金の愛を知る事になる。

「久しぶりね、一夏……」

「そうだな、鈴よ。」

第一の幼馴染と再会する黄金

「その……私との約束を覚えてる?」

「ああ、卿との盟約は忘れもしない」

「じゃ、じゃあ……その……」

「甘いな、鈴よ……卿は私の愛は知っているが、私は卿の愛は知らん」

黄金に愛の深さを試される鈴

「よく、見ておきなさい一夏、これが私の愛よ……」

「ふむ、悪くは無いが・・・愛が足りんよ、鈴」

鈴の「愛は黄金の心を射止めるには届かなかつた。」

「僕はどうする事も出来ないんだ・・・」

「卿はそれでいいのかね?」

黄金は貴公子の姫君に問う

「僕は貴方みたいに強くなんて無い・・・」

「ならば、頼れば良からう?」

「でも、僕の話を聞いてくれる人なんて・・・?」

「私は総てを愛していふと言つた。ならば卿も例外などでは無い」

「僕の言葉を・・・聞いてくれるの・・・?」

「その通りだ。さあ、卿の想いを吐き出すが良い」

「嫌だ・・・・嫌だよ・・・諦めたくないよ・・・

まだ、やつてい事だつて、いっぱいあるよ。なのにこんな風に終わるだなんて・・・

そんなの嫌だよ。・・・助けて・・・助けてよ、一夏ーー!」

「任せろ・・卿を救つて見せよ！」

そして姫君は黄金の手を取る。

「お久しぶりです。獣殿！」

「ああ、卿も健勝そつで何よりだ。」

黄金は、己に忠誠を誓つ銀の髪に黄金の片目を持つ旧友と再会する。

「ほう・・姉上を模す。・・か、卿が望んだ強さとは本当にこれが
ね？」

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「真に己の渴望を見つけられなかつたか・・・ならば、私の愛で卿
の道を照らそつ」

空虚な力に支配された彼女を黄金が破壊する。

「強さとは、一体何なのでしょうか？」

「それは私や姉上が見つける事では無い、力は単なる力に過ぎんよ。何の為に卿は戦う？」

「分かりません・・・教官の様になりたいと思って、力を求めていました。」

「では、もう一度考えてみる事だ。何のために力を求め、戦うのか？・・・幸い、時間は沢山ある。」

力の意味を銀の少女は摸索する。

「貴方を私の嫁にしてみせる。」

「はははははー良かろう、卿の愛を私に見せてくれ」

銀の少女は黄金と共に在ろうとする。

臨海学校、照り輝く太陽の元、海で戯れる少女たちの瞳に、黄金の裸身が写る。

「つむ、海水浴など初めてだ。海は未知で溢れ返っている。」

「…………ブフオオオオオオオオオオオオオツ…………？」

「…………？」

「目があー目があああああつ…………？」

「美しそぎで、直視できないイイイツ…………？」

「ふ、ふふふ・・我が人生・・・悔い・・・無し・・ガクツ」

露わになつた黄金の裸体は乙女達の眼を灼く

「ぐおつ！？・・ははははは、枕投げとは面白いものだな…………」

未知の体験に、子供の様にはしゃぎ回る黄金の獣

そこに威厳もカリスマもあつたものでは無かつた…………

「いつくん、久しぶり～」

「久しいな、束殿」

世界の歪みを生み出してしまつた天災と再会を果たす黄金

「ぬつ！？待て、第1！？」

「…………で奴を…………」

「くつ、カールよ、」ニで卿を感じるとは・・・

力に慢心していた第一の幼馴染は、水銀の手が加わりし舞台で暴君を演じてしまう

そして黄金は墜ちる。

「久しぶりだな、カールよ・・・」

「ええ、獣殿も変わり無き様で・・・」

「何故、卿はまた永劫破壊を?」ニに円環は無いが・・・

「獣殿、私の願いを聞き入れてくれはしませんか?」

そこで黄金は水銀の願いを知る。

「さて、私も挑ませて貰おうか・・・」

福音に挑むは新たな力を手にした黄金

「我が速度についてこれるか!?」

総てを追い越す速度で福音へと槍を振るう黄金

「ふむ、メイド喫茶か・・・面白」

「フオオオオオオオオツ・・・・・?」

着なくとも良いのに態々、執事服を着る黄金

「良べど、戻つて来てくれたな。主よ」

執事なのに偉そうな黄金

「わて・・・卿等は私を怒らせた・・・」

「ハア? 何言つてやがん――ガアツ! ! ! ?」

黄金から放たれる殺意は余りにも圧倒的で凄まじい・・・彼等は黄金の逆鱗に触れてしまつたのだ。

「私はM、そして織斑マドカだ・・・」

「卿は・・・・」

戦奴として生きるしかない姉のクローンと黄金は出会い

そして、黄金と水銀は雌雄を決する。

「ふつ、カールよ、今こそ盟約を果たそつではないか・・・」

「そうだな・・ハイドリヒ・・いや、織斑一夏」

総軍を率いる黄金、そこに集つは戦奴として無く、肩を並べ信頼する戦友として集つた者達

「行くぞ、卿等の渴望を叩き返してやれ！・・・案ずるな私は負けん！！」

Dies irae, dies illa, solvet s
aeculum in favilla. Teste David
cum Sybilla.

——怒りの日 終末の時 天地万物は灰燼と化し、ダビデとシビラの予言のとくに碎け散る

Et armata et verba vulnerant Et
arma

——武器も言葉も傷つける

Quantus tremor est futurus, Qu
ando iudex est venturus, Cunct
a stricte discussus rursus.

——たとえどれほど大きな戦慄が待ち構えていようとも 審判者

が来たり、厳しく糾され 一つ余さず燃え去り消える

Fortuna amicos conciliat in opia
amicos probat Exempla
順境は友を与えるだらつ 欠乏は友を試し絆を高める事だらつ

Tube, mirum spargens sonum Per
sepulcra regionum, coget omne
s ante thronum.

——我が總軍に響き渡れ 妙なる調べ 開戦の号砲よ 賦すべか
らく玉座の下に集うべし

Levis est fortuna id cito repo
scit quod dedit

——運命とは軽薄である 与えたものをすぐに悉く裏切るが如く
返すよう求める。

Lacrimosa dies illa, Qua resur
get ex favilla

——彼の日 涙と罪の裁きを 卿ら 灰より 蘇らん

Non solum fortuna ipsa est cae
ca sed etiam eos caecos facit
quos semper adjuvat

——運命はそれ自身が盲目であるだけでなく 常に助ける者 救
われる者達をも盲目にする

Judicandus homo reus Huic ergo
parce, Deus.

——されば天主よ その時彼らを許したまえ

Misce stultitia m consilii s bre
vem dulce est desipere in loco
僅かの愚かさも思慮に混ぜよ 時に理性を失え それが望ま
しい

Pie Jesu Domine, dona eis requi
iem. Amen.

慈悲深き者よ 今永遠の死を与える ハイメン

Ede bibe lude post mortem null
a voluptas

— 食べろ 飲め 遊べ 死後に快樂はないのだから

「「 Atziluth 」」

流出

Du - solist Dies irae

— 混沌より溢れよ怒りの日

Acta est fabula

— 未知の結末を見る

これはラインハルト・ハイドリヒが織斑一夏として生まれた人生を
描いた英雄譚である。

外伝 もし一夏が獸殿だつたら……（後書き）

さて、次回を書くのは何時になるのやうり……

まあ、氣力がドバアッと湧いてきたら、一気に書きます。

特に感想を書いたり、評価をしてくれると、『氣力ゲージ』が貯まりやすくなります。（ゲームかよ……）

うん、鈴の渴望は出来上がりまして、創造の効果も考えてあります。

原作と似たような効果です。

ただ、シャルの詠唱にピッタリな詩は見つかりましたし、渴望もあるんですが……

その渴望から、どのような戦闘能力に変換すればいいか考え込んでいます。

第七話（前書き）

はい、徹夜で書きました。

明日も大学なのにねえ・・・

でも、読者の期待に応え、感想を貢うべく、俺は書く！！

ということで今回、中国娘の登場です。

第七話

パーティーの翌日、一組の教室では噂が広まっていた。

その事について、隣の席の谷本癒子が一夏に聞く

「ねえ、織斑君は転校生の話、聞いた?」

「いや、知らん・・・」

第七話

「何でも、中国の代表候補生が一組に転入して来て、クラス代表になつたらしいんだって」

「そうか」

「あら、私の存在を危ぶんでの転入かしり

相変わらず自身満々にポーズを決めて言ひセシリア

もしエリが無い世界であったならば、彼女は女優になつていたのだろうか?

“ 中国が・・・・まさか、な・・・ ”

「 む、やはり気になるのか? 」

「 一応、戦う相手ともなれば、少しあは気になる。 」

「 ・・・むう 」

不機嫌そうに複雑な表情になる筈

「 来月にはクラス対抗戦だ。 それまでに相手を知る事に損は無い 」

「 それよりも私と二人きりの訓練に付き合つてもうえません」と?
あれをうまく発動させられる様になりたいんです。 」

確かにセシリアの言つとおりだった。

彼女はあれ以来、創造を上手く発動し切れていない

何故なら渴望を強靭な意志で維持しなければならないからだ。

創造は、どれだけ強く渴望し続けていられるかと言つ事が決め手となる。

簡易術式である為、創造を発動し維持するには強靭な意志で渴望を支える必要がある。

故に集中を切らしてしまつと即座に解除され、それまで麻痺していた疲労が一気に襲つてくるのだ。

嘗ては必殺技だった創造も、使い所を誤れば逆に敗北してしまうこともあり得る。

しかも彼女の創造は霸道型である為に効果空間内にいる者達の影響を受ける為、求道型よりも強靭な意志を持つて自分の渴望を維持しなければならないのだ。

創造について、千冬達に問い合わせられたが一夏は束が仕込んだシステムだと説明した。

「今の所、展開時間が20秒前後、筹を加えると12秒が限界か・・・」

「はい・・ですか、一夏さんの」教授を

セシリ亞が一夏に聞くが

「生憎だが、お前は霸道型の創造だ。俺の求道型とは違つ」

「霸道型？」

不思議そうに聞いてくるセシリ亞に説明をする。

「霸道型は周囲を変える物だ。多数を相手に向ぐが、渴望を強固に維持している必要がある。」

「求道型の方は何なんだ？」

筹も気になる様だった。

「求道型は自分を変化させる創造だ。一対一に向いてこる。渴望も自分のみに向けられるために霸道型よりは維持しやすい」

「では、求道型の方が良いのか?」

「いや、そういう訳でも無い···要は使い方だ。」

そう言つて、簡潔に纏める一夏

「織斑君、頑張つてね!」

「フリー・パスの為にも!..」

クラスメイト達も応援してくれるのは良いが、少しは欲望を隠したらどうか?と思う一夏

「今の所、専用機持ちは一組と四組だけだから余裕だよ。」

クラスメイトの鷹月静寐がそう言つた直後に

「その情報、古いよ

教室の入り口から聞こえてきた声に全員が眼をやると

先程思い出していた小柄なツインテールの少女が、そこに立つていた。

「一組のクラス代表も専用機持ちになつたの、そう簡単には優勝出来ないから!」

「お前・・・鈴か？」

一夏は何と言つ「い」都合主義の展開か・・・と思ひながらも、久しぶりの友に話しかける。

「やうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今口は宣戦布告に來たつて訳
ビシィー」と指を指してきた彼女を見て、一夏は・・・

「・・・似合わんぞ」

「んなつー? 何でここと重つのよ、アンタはーー」

いきり立つ彼女の後頭部から、『Pスッ』と重つ音がした。

「痛あー、何すんの・・ふえ!-?」

彼女が振りかえれば、千冬が立つていた。

「もうSHRの時間だぞ?」

「ち、千冬さん・・」

流石の彼女も千冬の登場にたじろぐ

「織斑先生だ。早く行け、馬鹿者」

「す、すいません・・また後で来るからね!逃げないでよね、一夏
!-!」

そう言つて自分のクラスに戻つてゆく鈴

“まさか、代表候補生になつてゐるとは・・・”

二年前に別れた彼女からは想像も出来ない事だつた。

午前中の授業が終わつた後、昼食を食べる為に鈴と共に食堂に来ていた。

一夏は日替わり定食、鈴はラーメンを食べていた。

「しかし、驚いたぞ。お前が一組の転入生で代表候補生になつてゐるとはな」

「ひつちだつてテレビ見て吃驚したわよ。なんでI S I動かして、ここに居るのよ?」

「会場間違えて、触つたら起動した。」

「何それ・・・あいつ等は騒がなかつた?」

「ああ、騒いだ。」

思い出すのは自分を慕い、兄貴と呼んでくれた中学時代の舍弟達の事だ。

彼等は一夏の為なら何でもすると云つていた彼等は、マスクの取

材を交代交代でシャットアウトしてくれていた。

「勞つてやつたら“兄貴にそいつ言って貰えるなら何でもしますぜ”と言つて張り切つていた。

彼等の事は後に語るとして・・・

「一夏、そろそろ説明してほしいのだが?」

「そうですね、一夏さん。もしかして、此方の方と・・つ、付き合つていらっしゃいますの!?」

テーブルを叩いて、篠とセシリアが厳しい表情で問い合わせてくる。

「べ、ベベベ別に私は・・」

「違う、一人目の幼馴染だ。」

慌てふためく鈴の代わりに、至極冷静に一夏は言った。

「一人目・・?」

「お前が小学4年まで、鈴が小学5年から中学2年までだ。」

篠に説明する一夏、その様子を見て鈴は溜息をついた。

「はあ・・・アンタは相変わらずのハードボイルドね。」

「む?・・・彼女が篠、前に話した道場の娘だ。」

「ふうん、そうなんだ・・・」

鈴は簫を見定める様にジロジロと見る。負けじと簫も見返している。鈴の視線が彼女の一瞥に来た時、一瞬だけ頬が引き攣つた気がしたが気にしないで置く

「初めまして。これから宜しくね」

「ああ、此方こちら・・・」

お互の背後に相対する龍虎が見えるのは氣のせいだらうか?

「んんっ!私の事も忘れて貰つては困りますわ。

私はイギリスの代表候補生、セシリ亞・オルコットですわ。」

「じめん、アタシ・・・他の代表に興味ないから」

「なッ!?

そつ言つて一夏の方を向く、鈴

「ねえ、アタシが工Uの操縦見てあげようか?」

「一夏と訓練するのは私の役目だ!..」

「そうですね!貴方は一組でしょう!...敵の施しは受けませんわ」

「アタシは一夏と話をしたんの、部外者は引つ込んでよ」

「「むう・・・・・」」

不敵に微笑む鈴と彼女を睨む篝とセシリア

「貴方」」や、後から出てきて何を仰りますのーー?」

「後からじや無いんだけどね。アタシの方が付き合はれて長いんだし」

「それを言つなら、私の方が早いーーー!」

お互いに牽制しあつ乙女達、その様子を興味深そうに見ている生徒達

そして修羅場の真つ只中にいる一夏は・・・

「・・・・・ふう」

のんびりと茶を飲んでいた。

「「一夏『やん』ーーー!」」

「・・・・・・・?」

怒ったように篝とセシリアが一夏に迫る。

が、当の一夏はそんな事構わずに鈴を見る。

「お前の父親は元氣か?」

「う、うん、元氣・・・だと、思つ

「……………そうか」

「どこか暗い調子で返した鈴に何かあつたと察する一夏

そこで「昼休み終了」のチャイムが鳴る。

「じゃ、じゃあね、一夏。また後で」

「ああ・・・」

何か誤魔化すような様子で去つて行く鈴

それを見て、一夏は

“一度、話を聞く必要があるか・・・”

またお父さん的な事を思つのだつた。

放課後、第三アリーナでは一夏が箒とセシリ亞相手に訓練していた。

「ハアアアアツ！！」

やつとHSの使用申請が通つた箒は打鉄を纏つて、一夏に切りかかっていた。

「ふん！」

ガギーン！と彼女の持つブレードを雪片弾型で受け止める。

「そこ…」

そこへセシリアがレーザーライフルを撃ちこんでくるが

「つーー！」

「ぐうつーー？」

箒を凄まじい脚力で蹴り飛ばし、一回転して剣でレーザーを切り裂く

「まだまだ甘いや・・来い、セシリア」

「はーー！」

一夏と距離を置き、攻撃を躊躇しながら詠唱をするセシリア。

箒もすぐに持ち直し一夏をセシリアに近づかまことする。

—— Creu —— 創造
S e r e n g o l a u d y d d t e i m l a d s y r t h
i o m e w n c a r i a d —— 星光降り注ぐ、恋慕心情

異空間が展開され、雨粒の如き弾幕が一夏に襲い掛かるが

「おおおおおおーー！」

零落白夜を使用して弾幕を薙ぎ払い、彼女への道を切り開く一夏

そこへ簫が切りかかってくる。

「ハアアアツー！」

「くつ・・・

「まだですわよ！」

消し切れ無かつたレーザーの雨粒が四方八方から襲い掛かる。

が、一夏の寸前でレーザーが霧散した。

すると一夏は一旦訓練を止めて、セシリ亞に近寄る。

「・・・25秒、記録更新だな。」

「はあ、はあ・・・そうですか・・・まだまだの様ですわね・・・

「ああ、だが簫も加えた状態では大幅に長持ちしている。」

「そう言つて頂けると、幸いですわ・・・

喋るのも億劫なのか、荒く息を吐きながらへたり込むセシリ亞

「今日はここまでだ。簫も良いな？」

「・・・私はまだ行けるぞ」

遊び足りないような子供の様な表情をする簫に一夏は言つ

「創造を加えた訓練は相当消耗する。ある程度の余裕を持たんと明日に響く」

あの弾幕を躲すのに筹も一夏と同じ様に挑んでみたが、かなり複雑かつ高速の機動で回避しないといけないので、見た目以上に体力を消耗するのである。

創造を展開するならば尚更だ。

「セシリ亞、立てるか？」

「ええ・・何とか・・」

一夏は彼女の手を取つて立ち上がりせる。

すると、一夏は一人を抱え上げた。

「な、何をする！？」

「い、一夏さん！？」

一人が驚いた様に声を上げるが、一夏は氣にも留めない

二人は一夏の腕を椅子代わりに、彼の首に腕を回している状況だ。

「余り無理をするな。筹も結構、疲れているだろ？」「

「だからと言つて、この体制は・・・」

篇が最後まで言わなかつたのは、脳内軍師モツピーが何か助言したからだらつ・・

「一夏さん。その・・重くないですか?」

ゼシリアの質問は、乙女にとつて結構気になる質問である。

ここで原作の一夏なら、一人を比べたりして失礼な事を言つたりするだらうが

この一夏はそんな真似はしない

「大した事は無い・・」

そつとマキナ一夏はアリーナから彼女等を抱えたまま出て行くのだった。

二人を反対側のピットに運んだ後、一夏は自分が出てきたピットに戻つて来ていた。

そこへ鈴がタオルとペットボトルを持ってやつて來た。

「お疲れ、一夏。飲み物はスポーツドリンクでいいよね?」

「ああ、待つていたのか?」

「えへへ、まあね・・」

「どこか嬉しそうに笑える鈴からタオルを受け取り、汗を拭つ一夏

「ね、ねえ、一夏。」

「何だ？」

「やつぱ、アタシがいないと寂しかった？」

「…………そうだな」

「や、やつぱり、一夏はアタシが居ないとダメみたいね！」

何か凄く嬉しそうな顔をして眞つ鈴

だが、どこか空虚や寂しさを感じさせれる何かがあった。

「…………鈴」

「何？ いち――ツ！ ？」

突然、一夏に抱き寄せられた鈴は一気に顔が真っ赤になる。

「いいいいいい、一夏！ ？」

混乱する鈴に一夏は語りかける。

「何があつた？」

「ツー？ ？ な、何を」

彼女の体が強張り震えた声で一夏に返す。

一夏は鈴を優しく抱きしめると、耳元で囁く様に言った。

「無理をするな・・お前に何があつたのかは知らん。だが、お前は一人じゃない」

「い、いちかあ・・・・」

そのまま鈴は一夏の胸の中で泣き出す。

一夏は胸の中の彼女が泣き止むまで、優しく撫で続けていたのだった・・

「い、めんね、一夏。カッコ悪い所、見せつけやつたね・・・」

「気にするな。お前が笑顔になるなら構わん」

「一夏・・・・・」

ある程度、泣いて落ち着いた鈴は様々な事を一夏に話してくれた。

両親が些細な事で喧嘩して離婚し、母親の方へと引き取られた事

寂しさを紛らわす為に必死で努力して代表候補生になつた事

「鈴、別れる前に俺が言った事を覚えてるか？」

「うん、覚えてる。」

“ 例え別れる事になつても、お前がまた会いたいと願えば、いつかまた会える。”

彼女との別れる時に言った一夏の言葉である。

「 私ね、あの言葉があつたから今まで頑張つてこれたんだよ・・・
？」

「そ、うか……」

「うん、それで一回とおた会えた。」

「ああ・・・」

すると、鈴は一夏に抱きついて来た。

「会いたかった・・会いたかったよ、いちかあ・・・」

「鈴」

そんな彼女を一夏は抱き返すのだった・・・・

「俺は部屋に戻る。また明日だ。」

「うん……もう二度とやばい」

「何だ？」

「夏は誰かと一緒に部屋なの？」

その質問が引き金となってしまった。

「ああ、
篇とだ。」

— それまで、どういう事……？

先程のしおらしをは何廻へ行つたのやら？

妙に冷たく低い声で聞いてくる鈴の眼はハイライトが消えていた。

一夏は事情を説明した

……それで、その子で靈食を進むておこなうて事?」

— そうだ、幼馴染と同室で助かった。

俯いた鈴からは何か黒いオーラの様な物が出ており、ブツブツと何か呟いている。

つたら、いいわけね・・・

「何だ？」

「だから！ 幼馴染だつたら良い訳ね！ ！ ？」

「ツー？」

凄まじい鈴の気迫に思わず、一步下がつてしまつ一夏

「この俺を退かせるとは・・・」

女とは時に神すらも超える恐ろしさを發揮するのだが。

「一夏ーーー」

「・・・何だ？」

「幼馴染は一人いるつて事、覚えておきなさいよ・・・

そう言い残し、鈴はピットを去つて行つた。

「と、言つ訳だから部屋代わつて？」

突然、部屋にやって来た鈴が言つた言葉である

「ふざけるな！何故私が！！」

寝巻に着替えた笄が鈴に怒る。

「いやあ、篠ノ花さんも男子と同室なんて嫌でしょ！」

「べ、別に嫌とは言つていない！…」

女の争いを遠巻きに見ている一夏は、下りんと言つた様子でいた。

「とにかく、私もここで暮らすから」

「ふざけるな、ここは私の部屋だ…出で行け！…」

「ところどき、一夏。約束を覚えてる？」

「無視するな…」うなつたら力づくで…・・・

部屋に立てかけてあつた竹刀を取り、鈴に振り下ろさうとした箒の腕が一夏に掴まれていた。

「落ち着け、箒。鈴も無駄に煽るな」

「「「う・・・・」」

一人共じょんぼりするのを見て、一夏は話す。

「箒、お前は頭に血が上ると、すぐに竹刀を振るうのは止める・・・

“分かつたな？”と目で叱りつける一夏

「分かつた・・・」

今度は鈴の方へと向く

「約束の事だつたな・・・料理が上達したら毎日酢豚を食べてくれる。

だつたか・・・

「 わへ、わうよーーー」

その言葉に篝は田を見開き、鈴は賭け事で逆転リーチが来た時みた
いな調子になる。

「 もしかして、あれはプロポーズか?」

「え、ええええええと・・その・・・

「ここまでストレートに聞かれるとは思つてなかつた鈴は混乱してし
まつた。

「そそそそ、そんな訳無いじゃない!!か、勘違いしないでよね
!ただの味見係なんだからね!!」

ああ・・・悲しきかな、ツンデレの性・・・

「一夏の馬鹿!アタシの馬鹿ああああああああああああああああああ

そつ言つて泣きながら部屋から出て行く鈴であつた。

「・・・・・何だつたんだ?」

「馬鹿者が・・・・・・

流石の篝も鈴の哀れさに涙を流すのだった・・・・・

翌日、生徒玄関前に張り出された『クラス対抗戦日程表』

そこに書かれていた一夏の相手は一組の代表となつた鈴だった。

第七話（後書き）

あ～あ～、やつちやつたよ・・・

途中までいい雰囲気だったのに・・・

鈴ファンの方すいません

でも結局、一夏は父親的な感情しかない訳です。

鈴に対してもです。

一夏の中学時代の話、兄貴伝説は少し先で語ります。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら（前書き）

はい、突発的に書きたくなつて書きましたが、少し雑な感じがします。

そしてまさかの「一ト一夏、メルクリウス一夏、水銀一夏です。

外伝2 もしも一夏が水銀だったら

「織斑一夏と言つ・・私は人前で話すのは苦手でね・・これ以上は勘弁して頂きたい」

IS学園に転入してきた男子は、無造作に膝裏まで伸ばした黒髪に蒼い瞳

そして芝居がかつた口調で口元に薄い笑いを浮かべた少年だった・・

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第一話「水銀の場合」

「お前はろくに挨拶もこなせんのか?」

「誰かと思えば貴方でしたか、我が姉よ。この様な形での再会するとは・・」

「その芝居がかつた口調は止める。鬱陶しい」

「ああ、申し訳ない・・しかし、これが私の素なのですよ・・故に『容赦召されよ。姉上殿?』

「織斑先生と呼べ・・・お前に構つてると時間が足りなくなる。」

「おや、それは申し訳ない。」

そう言つて水銀は席に座つた。

その後、幼馴染の篠に連れて来られた水銀は屋上にいた。

「久しぶりだな、一夏」

「ああ・・・そうだな、篠。君と六年振り再会したのも、何かの縁と言つものか」

「・・・芝居がかつた口調は変わらないんだな。」

「あ・・・と、疲れたように溜息を吐きながら篠は言つた。

「ああ、これが私なのでね・・・」

「やうか・・・」

「ふ、実に数奇だとは思わないかな?姉によつて離れ離れになり、

その原因によつて再び出会つ事になると言つのも

「聞違つ無く、お前だな・・・」

そう言つた篠の表情は疲れていた。

「ちよつと聞こへへ?」

英國の淑女が水銀に話しかける。

「何かね？お嬢さん（フロイライアン）」

「くつ・・人を馬鹿にしたような言い方ですわね。」

「すまないね。この喋り方が私なのだよ」

「まあ、良いですわ。英國代表候補生である私、セシリア・オルコットがこの様な道化師の様な男の言葉を気にする必要はありませんもの。」

傲慢な言い方であるが、その様子を見て水銀は晒っていた。

「ふふ・・・」

「な、何が可笑しいんですの！？」

「いや、失敬。君の様に振る舞つ女性は、私の周りではいなかつたものでね。」

「まあ、良いですわ。何か分からぬ事が有つたのであれば

泣いて頼まれるのでしたら、教えて差し上げてもよろしくてよ！

何せ、私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから！――

「生憎、私も倒したがね・・・」

「わ、私だけと聞きましたが・・・」

「女子の中では、の話では無いのかな？」

「一や一やと廟アマツの行アマツひ水銀

「なッ！あ、貴方も教官を倒したのですか！？」

「ああ・・・と言つても勝手に自滅しただけに過ぎアマツんよ

「どうこう事ですの！？」

「さて・・・君が知り得た所で何も変わりはしないよ」

そのまま、休み時間が終わってしまう

クラスの女子達が水銀を代表にする事に同意して、それに納得しないものが居た。

「待つて下さい！納得がいきませんわ！――」

机を叩きながらセシリアが立ち上がる。

「そのような選出は認められません！――大体、クラスの代表が男だなんて言い恥さらしですわ！――

「私は、このセシリア・オルゴットにそのような屈辱を一年間味わえと言つのですか！？」

更に彼女は捲し立てる。

「実力で言えば、私がクラス代表になるのは必然！」

それを珍しいからと言つ理由で極東の猿にされては困ります！！

大体、文化も後進的な国で暮らすこと自体私にとっては苦痛で――

彼女の声が水銀の晒つ声によつて遮られる。

「何が可笑しいのですか！？」

「くくく、まさか代表候補生ともあう者が他国を貶す発言をするとは・・蒙昧無知とは正にこの事か・・」

「何ですって――」

「君の一人の劇はつまらないのだよ。一人だけの演劇など滑稽にしか為らんよ。」

暗にお前ではつまらないと言う水銀

「決闘ですか――」

そして彼女は彼の用意した舞台へと上がる事になる。

「では、最初の恐怖劇グランギーロルを始めるとして・・・

セシリ亞の攻撃がまるで幻惑されているかの如く当たらぬ

「な、何故当たらんないですのー?」

「セヒ、何故かな?・・・言つておぐが“私は何もしていない”」

水銀の掌で踊らされている彼女は、それに気がつかない

「セヒ、幕引きにするとしようつ・・・」

次の瞬間、セシリアのエヒ、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になった。

「な、何が・・・」

「セヒ、もつ一度言つておぐが“私は何もしていない”」

ゆうじと消えて行く水銀が、セシリアには分からなかつた。

「本当にアレは何でしたの?」

全く理解が出来ない事態にセシリアはその場に立ち尽くしていた。

そこには不気味なほどの静寂だけが残されていた・・・

「久しづりね、一夏。」

「ああ、今度は君に巡り合つとは・・・私も中々に数奇な運命に恵まれてゐる様だ。」

「相変わらず、胡散臭いわね・・・」

「ふつ、他人に嫌われる事など慣れているよ」

「いや、それもどうかと思つ」

水銀の仕業でシシ「//」回りだるを得ない鈴

「約束、覚えていろわよね?」

「ああ、君が私に申し込んだ婚姻の約束かね?」

「ふえつ！？」

「私としては、物事には順序と云つものが大事だと思つのがだがね・・・」

「

「こやあああああツ！？」

水銀に良い様に弄ばれる鈴

「乙女の純情、返せええええツ！？」

「おや、君が勝手に思い込んだに過ぎんだらつ。」

「つるわああああいつ！？」

「やれやれ・・怖いものだな、乙女の怒つとは」

そこへ予想外の襲撃が来る。

「ほつ・・・まさか、舞台に乱入してくるとは・・・」れもまた面白い

「はははは、どうした? この程度では私の劇を超える事など出来んよ」

鋼鉄の騎兵に彼の纏う白銀の機体から凄まじい重力が襲い掛かる。

「うなれば、グレートアトラクター、ブラックホールである。

重力の渦に飲み込まれた騎兵はその力に耐え切れずに圧潰してゆく

「ふむ、この程度では足りぬ。もっと私に未知を見せてくれよ? 篠ノ之東・・」

「ヤリ、と何処かに向かって言つ水銀

「助けてよ、一夏あ・・・」

「ああ、君の境遇は確かに不幸だ・・ならば私は救いの手を差し伸べ、大団円にして見るのも一興か」

水銀はシャルロットにどこか恋い焦がれた歌姫の姿を見た。

「一夏のえつち・・・・・・

「……………」

「あれ？一夏……鼻血が……鼻血がすごい事になつてゐるよ……？」

「…………」

「ちよつと……一夏？……一夏！？」

「あ、ああ……すまなかつたね。少しのぼせてしまつた様だ。もう大丈夫だ。問題ない」

「凄い勢いで鼻血が出てるけど！？」

「！」の位で私は死なんよ……

「よかつた……」

そういうて水銀に抱き着くシャル

「……………ぐふつ」

「一夏ああああッ！？」

血の海に沈む水銀

「認める物か……貴様が教官の弟であるなど……」

「へへへ、ならば君は何であると申つのかな？」

銀の少女がどうやっても応えた様子が無い水銀

「どうした、私はここだが？」

「いのつ……」

「そう、こきり立つていては獸と変わりないモノだぞ。」

「黙れ――！」

水銀の舞台で弄ばれる銀の少女、ラウラ

「成程、V-Tシステムか・・他人の模倣など無粋な物でしかないの
だがね・・・」

水銀は必滅の審判を模造品に叩き込む。

「粗悪な模造品など在るだけ無駄だ。」

そしてラウラは水銀に宣言する。

「お前を私の嫁にする……」

「・・・まさか、この私が驚きで固まる事があつたとは

臨海学校にて

「ふむ、この恰好が落ち着く」

「「「「露出狂かよ！？」「」「」」

裸にボロ布一枚の格好にツツコミ所が満載だ。

そして出会うは水銀と天災

「久しぶりだ。束殿」

「は？ いつくん。相変わらず暗いね～」

「ふつ、貴方はいつも子供の様だ。」

お互い不思議な関係で繋がっている水銀と天災

「さて、貴方は私に何を見せてくれるのかな？」

これは水銀のメルクリウスが送る、一ート的な愛が詰まつた劇場である。

外伝2 もじも一夏が水銀だったら（後書き）

さて本編の「一夏が水銀だったら」がどうじよつたか・・・

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら（前書き）

はい、第八話の中身が中々まとまらないので時間稼ぎの為の外伝です。

今回はエロいです。

すごいねシュライバー

では、どうぞ

外伝3 もしも一夏が白騎士だつたら

「僕の名前は織斑一夏って言うんだ。よろしくね。」

IS学園に入学した男子は銀髪で片目に眼帯をした男の娘であつた。

外伝、もしも一夏が・・・シリーズ第三話「白騎士の場合」

「まさかのシヨタツ子…！」

「可愛いー！食べちゃいたいー！」

可愛らしい男の娘に色めき立つクラスメイト達、すると・・・

「騒がしいな、このクラスは変態を集めたのか？」

そう語つて、一夏の姉である千冬がやつて来たのを確認した一夏は

「お姉ちやあああああん……」

「「「「「つおつ……？」

神速の速さで即座に抱き着いた。

そして姉の胸の中で頬ずりをする一夏

「えへへ……お姉ちゃん……」

「こら、離れないか

「……ダメ?」

「ブフ ッ……！」

ウルウルした瞳で見上げられた千冬の鼻から大量の涙が溢れる。

「きやあああああつ……？大丈夫ですか、織斑先生……？」

「はあ……はあ……大丈夫だ。むしろ元気になつた。」

「現在進行形で鼻血がヤバい事になつてますけど……？」

そう言う真耶を無視して千冬はクラスに言い放つ。一夏を胸に張りつけたまま

「諸君、私がこのクラスの担任になる織斑千冬だ。そして、この可愛らしい弟は私のだ。

良く覚えておけ」

「「「「「何イイイイイイイイイ……？」」」」

その宣言に衝撃を受ける全員

そして、その宣言を一夏に恋する乙女が許す筈がない

「ちちよ、千冬さん。何を言つているんですかー？一夏は私のです！」

「！」

「！」では織斑先生と呼べ、篠ノ花。ここは最初から私のだ。」

何か一人の間で妙な争いが勃発し始めた。

それを真耶はおろおろしながら見ているだけだし、クラスの女子は面白そうに観戦しているだけだった。

そして、未だ千冬の胸に張りついている一夏は・・・

「・・・・んう？」

千冬の胸から顔を離して篠の方を見ると・・・

「ほーーーうーーーきーーーーい」

物凄く甘ったるい声を出して飛びついた。

「のあああつーーーい、一夏ーー？」

「んーーー？ 久しぶりだねえ、篠」

篠の胸にすりすりと顔を埋めながら嬉しそうな表情で篠を見上げる

一 夏

「ブハアッ！…！」

筈も千冬と同様に鼻から愛を噴きだした。

そして阿鼻叫喚の場へと化した教室でのSHRは一人の負傷者を出しつつも、終わつたのだった…。

そして屋上で改めて再会の挨拶をする一夏と筈

「久しぶりだね、筈。六年振り！…！」

「ああ、お前は相変わらず、そのままなんだな」

筈の言つとおり、一夏の身長は140後半で止まつていた。

「うん、何か成長が止まつちゃつたみたいなんだ。筈は大きくなつたねえ」

そつ言つて、筈の胸を見る一夏

「ど、どこを見て言つていい…！」

恥ずかしそうに筈は腕で胸を隠す。

「ねえ、筈…」

「何だ？」

「また、抱きしめて？」

「ツー？」

思わず、鼻を抑えて愛が噴き出さないようにする筆

久しぶりの幼馴染の無垢な懇願は相当効いた。

「あ、ああ・・良いぞ。」

「うわあーーー！」

物凄く嬉しそうに抱き着いてくる一夏はとにかく可愛かった。

「ふふ・・・何時まで経つても抱きしめられるのが好きなんだな・・

「

「僕はいっぱい愛して欲しいんだ。だから・・

「ああ、分かってる。好きだけ抱きしめてやる。」

「やつたあー大好きだよ篠

「ブフアツーーー！」

流石にこれには耐えきれ無かつた篠でした。

すると・・・

「お前達何をしていいの？」

千冬が屋上へとやつて來た。

「ち、千冬さん！？」

「織斑先生だ。・・・言つた筈だ、一夏は私の物だとな。」

「！」まで來るとは・・・貴方に一夏を渡しはしない！――

「ふつ、小娘が・・私から一夏を奪えるとでも思つたか！――

直後、チャイムが鳴つた。

「む、行くぞ。――夏」

「うん。」

「えつ？・・あつ！？」

いつの間にか簫から一夏を奪取していた千冬が、彼を抱えて教室へと戻つて行つた。

「くつ、待てええええええッ！――！」

必死でそれに追いすがる簫の姿があつた。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？ なあに？」

「なんですか！ そのお返事。私に話しかけられるのも光榮なのですからそれ、相応の態度と言う物があるのでは無いかしら？」

「「」あんね？ 君が誰だか知らないや」

「な、何ですって！？ 英国代表候補生にして、入試主席である。このセシリア・オルコットを知らないですって！？」

「だつて、お姉ちゃんと籌しか覚えてないから」

「なあ・・・・・・！？」

予想外の事態に硬直してしまったセシリア

すると、一夏は彼女を見てから

「えいっ！」

おもむろに抱き着いた。

「なあああああああああッ！？！」

突然抱き着かれて混乱するセシリア

彼女のそんな様子に構わず、一夏は彼女の胸をすりすりする。

「んん～～～いい匂いがする・・・」

「なつ、嗅がないで下さこーーー。」

「だつて、セシリ亞からいい匂いがするんだもの・・・」

「ちょ、止め、あふうん・・・」

彼女の体を弄りだす一夏

「ん～～こかなあ？」

「ひあああッ！～～？」

むこむこ、と彼女の形の良い尻に手を這わせて揉む一夏

いきなり始まつた耽美な劇場に、鼻息荒くして見守るクラスメイト達

「うん、手はここがいいかな」

そう言つて彼女の尻を揉みまくる一夏

「は・・あ・・あああ・・・」

セシリ亞は結構トリップした表情になつていた・・・

しかも、顔が真つ赤に染まり、目は蕩けて、全身を震わせてこる。

このまま最後まで行くかとクラスの全員が思つていたら、無料にも
チャイムが鳴るのだった。

「はふう・・・・・」

荒い息を吐いてへたり込むセシリアを抱っこして、彼女の席に戻してあげると

一夏も自分の席に戻るのだった。

その姿を恨めしそうに見る簞に氣づかずには・・・

まあ、原作通りにクラス代表が一夏になりそくなつて、セシリアが納得せずに立ち上がつた。

しかし、文句をいつ事は無く、ただ立候補しただけであつた。

まあ、ウォルフガング・一夏・シュライバーにキラキラした目でジイイイと凝視されたからであるが・・・

多分、彼女は彼に苦手意識を持つたか、ビジギのHロロ漫画の如く、見られて快感がフラッショバックしたか

彼女の表情からして、本当に前者だらうか・・・?

どうやら一夏は無自覚でセシリアを調教してしまつたらしい

恐るべし、ウォルフガング・一夏・シュライバー

そして決闘することになった。

その際、千冬が一夏に向けて言った。

「殺すなよ？・・・分かつているな？」

「うーん・・・頑張つてみる・・・」

“本当に彼女も災難だな”とセシリアに同情する筈であった。

僕、食堂に来ていた一夏と筈は適当な席に座っていた。

「お前は弁当なんだな」

「うん、料理するのは嫌いじゃないしね」

彼の弁当は何故にかドイツの家庭料理が多かったが、それ以外にも種類が豊富にあって

彩りも豊か。そして味は抜群だった。

そのことは良いとして・・・

「何故いるんですか？」

「うん？ ここは食堂だ。教師が利用していくても、おかしくは無いだ
うう」

そう言って一夏の隣にいる千冬はラム肉のローストを口に運ぶ

「美味しいぞ、一夏。」

「良かった。お姉ちゃんに褒めてもらひと嬉しいな」

「このバカツブル姉弟は」満悦の様子だった・・

「一夏、私にも一口くれないか?」

「いいよ。あ～ん

「あ、あ～ん」

一夏は簞にあ～んしてグラタンを食べさせた。

「美味いな・・・」

「やつ?なり良かつた。」

一夏コリ笑顔の一夏に簞も「満悦だった。

「あるこ～れ、一夏。私にもあ～んして食べさせい

「うん、こ～よ」

「わ、私も」

結局、三人であ～んしながら畳食を食べ終えたのだった。

放課後、千冬に連れられてきた部屋は寮長室だった。

「今日からお前は私といで暮らすんだ。」

「分かつた。で、荷物は？」

「もう、運んである。」

そう言って二人はベッドに腰掛ける。

「あれ？ ベッドが一つしかないよ？」

「問題ない、お前と私が一緒に寝ればいい。お前は私専用の抱き枕だからな」

その言葉を聞いて喜ぶ一夏

「せーた、お姉ちゃんと一緒に

どうせなら彼もタメロンである

緑にシテモ浴びて

うん！

一緒にシャワーを浴びて、一緒にベッドで抱き合って寝る。

もう手遅れなレベルだつた・・・

元から彼は愛されなかつた前世だつた為に愛して欲しいと言つ思つ
が強く

幼い頃からひたすらに愛を求めて。

しかし、千冬が自分を養つ為に頑張つてくれていたのは分かつていた。

だから、その分を筹や束に甘え倒し、帰つてきた千冬に甘えるところ生活をしていた。

第一回モンド・グロッソンのおこで誘拐された一夏は、この世界に於いて初の殺しをすることになった。

彼は油断していた所を薬で眠らせたが、起きてから事態を理解した一夏は激怒した。

それが誘拐犯達の不幸だろう

彼は白騎士だ。今までの平穏があつたからこそ白騎士は未だ覚めずにいたのだ。

それを彼らはたたき起こしてしまつた。

それも最悪な起こし方で。

この世界で千冬を貶める事＝前世でハイドリヒ卿を貶める事

つまり彼らはやつてはいけない事をしてしまつたのだった。

BGM : Einherjar Albedo

「UAAA AAAA AAAA AAAA AAAA AAAA AAAA ! ! ! ! !

結果、彼は右目を失いながらも誘拐犯を原形を留めぬまことに殺しき

くした。

そこへ迎えに来た千冬を見て、棄権した事を知ると泣きながら必死に謝り続けた。

千冬は優しく抱きしめてくれた。栄光よりも自分を選んでくれた。

その事に一夏は歓喜した。

“ならば自分は彼女の為の牙だ。この力の全てを彼女が愛する者の為に使おう”

これがウォルフガング・シュライバーが織斑一夏として生まれて、誓つた事である。

そして決闘当日

「はははははッ、織斑一夏、総てに於いて我が姉に愛と忠誠を誓つた。不死の白騎士！！」

「――ツ――？」

一夏から凄まじい殺氣が溢れ出す。

「泣き叫べ、劣等。此処に、神はない」

そしてスラスターを全力にして突っ込んでゆく。

「僕が一番最初の姉の牙だアアアアツ――――！」

「くつーーー！」

セシリ亞の持つ、スターライトMK-?からレーザーが放たれるがそれを総て躱しきる

「くつ、早すぎますわね・・・」

これでは当たらないと即座に判断したセシリ亞は切り札を出した。

「お行きなさい！ブルーティアーズ！！」

彼女のエリの名を冠するビットが放たれ、それぞれが独立機動で彼にレーザーを放つ

「ああああああアツ！ーーー！」

それすらも躱してゆくが未調整の機体である為、手一杯だった。

“負けてたまるか、負けたらお姉ちゃんにまた恥をかかせる・・・それだけは許せない”

その狂おしいまでの渴望はエリである白式

彼の聖遺物であり、今は力を失いしシェンダップが融合する。

その光りの中から生まれたのは、純白にして禍々しい騎士だった。

「なつ、一次移行ですって！？まさか貴方、今まで初期設定で戦つ

ていたのですか！？

セシリ亞の背に冷たい物が流れるのを感じた。

初期設定ですら、あの機動なら彼に合った状態の今ならどうだ？

白騎士を縛る枷は外れた。

今ここに最速の騎士が復活した。

Fahr hin, Wahalls lenchende
Welt

—ならば ヴァルハラ 光輝に満ちた世界

Zarfall, in Staub deine Stolze
Burg 簪え立つその城も ——微塵となつて碎けるがいい

Leb wohl, prangende Gotterpracht

—ならば 栄華を誇る神々の栄光

End in Wonne, du ewig Geschlecht

—神々の一族も 敬びのうちに滅ぶがいい

— B r i a h

創造

N i f f h e i m r F e n r i s w o l f

—死世界・凶獸変生

ならば誰よりも速く抱き着けばいい
それは彼の新しい渴望“誰よりも一番抱きしめて欲しい”

それゆえの絶対先制

セシリヤに音速を超えた速度で狂獸が襲し掛けた

彼女は手も足も出すに負けた。

最後の一撃を千冬が止めなければ、彼女は死ぬまでは行かなくとも、怪我を負っていた。

しかし彼女は狂おしいまでの強さに身を灼かれる。

「一夏さん。」

「何かな？」

「貴方を抱きしめても宜しいですか？」

殺しかけた相手であれども抱きしめてくれるのならば、即座に抱き着く。

白騎士も隨分と甘くなつたものである。

「ああ・・・・・」

「んん～～～～～～～？」

それを歯軋りしながら睨む姉と幼馴染

「後でオルコットとは話をする必要があるな・・・」

「くづ、一夏め・・・・」

更には

「おりむ～私にもお願ひ」

「い、よ、のほほんせん」

「ふあああ・・・・

「すりすり～～～」

のほほんせん参戦

「久しづりね、一夏」

「りいりいりいりん！・・！」

「あやああああああつ！・・？」

セカンド幼馴染も抱きしめられる。

「ひこやああああああああああああシ――。」

体中敏感なのに撫でまわされて、腰碎けになる鈴

クラス対抗戦

କାନ୍ତିଲି - ?

相変わらず大暴れ

ゴーレム、オワタヽ(^ O ^) /

「僕を助けてくれるの？」

「うん、シャルの事、大好きだから」

「ツ！？・・・ありがとう」

「どういたしまして・・・えい・い・」

「ちゅうひ、一夏！？」ダメ、そりは、はああああああんッ！…」

素っ裸のまま抱きしめられ撫でまわされるシャル。ご馳走様です。

びつや、から触り癖や弄り癖がついたらしい

「久しぶりだな、嫁」

「うん、クラッリサは元気？」

「ああ、いつも通りだ。お前の写真を見て鼻血を噴き出していた。」

ラウラと一夏は仲が良いらしい

「許せないなあ・・・ラウラにこんな事して・・ああ、許せないなあ・・・」

▼Tシステムに取り込まれたラウラを救うべく白騎士は突撃する。

物凄い速度で走り回る一夏

「織斑キyunの裸・・・ハアハア」

「ああ、食べたい・・・・・」

「つてか、あれ水の上を走つてない？」

「「「まあ、織斑君だし」」」

そんなんいいのか！？どうやら一組は常識が永劫破壊されてしまつた様だ。

「一夏さん。サンオイルを塗つてくださいいまし」

「いいよ、それじゃあ塗るよ」

なんでもエンターテインメントある | 夏

——夏、どうだ?」

似合ってしやう。お姉ちゃん。

「そうか。選んでくれた褒美だ。一緒に風呂に入れてやるう」

ヤ二たあッ！！

私モ!!」

モハ駆、ほしな

みんなとお風呂だ〜〜〜！！

ケレスの全員と入る事になつた風呂

止め！ああん！！

「やあああん！！」

「うわ～～～～～いー！」

風呂場でもう好き放題やつあやう一夏

「久しぶり、いつくん

「束お姉ちゃん！！」

「ふああああああつーーー！」

天災でも一夏の前では意味が無い

「クラフトオオオオオオオオッ！ーーー！」

水銀の手がけた舞台で墜ちる白騎士

Vor?ber, ach, vor?ber! geh, wi
lder knochemann!
—ああ わたしは願う どうか遠くへ 死神よどうか遠くへ行つ
てほしい

Ich bin noch jung, geh, Lieber
! Und r?hre mich nicht an.
—わたしはまだ老いていない 生に溢れているのだからどうかお
願い 觸らないで

Gib deine Hand, du schon und z
art Gebild!

—美しく纖細な者よ 恐れることはない 手を伸ばせ

Bin Freund und komme nicht zu
strafen.

——我是汝の友であり 奪つために来たのではないのだから

Sei guten Mut! Ich bin nicht
wild.

——ああ 恐れるな怖がるな 誰も汝を傷つけない

solist sanft in meinen Armen s
chaffen!

——我が腕の中で愛しい者よ 永劫安らかに眠るがいい

——Briah

——創造

Nielfheimer Fenriswolf

——死世界・凶獸変生

そして発動する真の詠唱による創造

「お姉さんに興味はある?..」

「うふふ...」

「うふー...わやああああああー!?..」

「生徒会長のおっぱいも大きいな~~~」

「いやあ、ダメハンハンー！」

学園の生徒最強だろうが一夏の前では意味が無い。

これはウォルフ・ギャング・シュライバーが新たな人生で得た愛の物語である。

外伝3 もしも一夏が白騎士だったら（後書き）

千冬姉のブラコンが酷い事になつてます。
一夏くん、もう女相手に無双です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189x/>

IS～インフィニットストラトス～黒騎士は織斑一夏

2011年10月30日14時38分発行